
流星のロックマン トライブ

シューティングスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン トライブ

【Nコード】

N5426N

【作者名】

シューティングスター

【あらすじ】

地球に超古代文明・ムーが存在していた遙か昔、高い科学力を持ち電波を自在に操ることで世界を支配していた。現在では地上から姿を消し、世界各地に伝説や神話、UMA（未確認生命体）の形でその片鱗を残すのみとなっていたのだが、FM王が地球に現れたことによる膨大なエネルギーによってムー大陸、ムーの超科学力でつくられた電波生命体達が復活の兆しを見せ始める。そしてロックマンもオーパーツを偶然手に入れたことにより、ムーの古代文明を巡る争いに巻き込まれてゆく……。

プロローグ

1ヶ月前　大西洋

大西洋の上空、一基の飛行機が飛んでいた。

大きさはそれ程無く、前方が橙色、後方が白色で翼にエンジンが2つ付いている至って普通の小型飛行機だ。否、飛行機というよりジェット機と言ったほうがいいだろう。

その小型ジェット機は偵察するように飛んでいる。暫く進むと雲が左右、前後で取り囲まれるように増えてきた。殆ど積乱雲だが、これでは前どころか後ろも見えない。

「雲が増えてきたなあ……」

このジェット機のパイロットはそう呟いた。一応レーダーを起動させているので迷わず進みたい方向へいける筈。

……だったのだが。

「ん？　故障か？」

レーダーの調子がおかしい。何か探知したかのように音をピコン、と放っているのだが、レーダーの映像が乱れている。時々ザー、という砂嵐のような音も聴こえる。

しかし、これではレーダーは役に立たない。

「困ったなあ……。ッ!？」

すると、今度は燃料などを計測しているメーターやスピードメーターの針が大きく揺れ始めた。これはオーバーしたとかそういう事

ではないだろう。現にオーバーする半分のスピードでしか飛んでいないはずだ。

「どうしたんだ！？ …… ツ！ しまった、ここはバミューダラビリスか！？」

バミューダラビリス。それは“船や飛行機が突如何の痕跡も残さず消えてしまう”とされる超常現象の一つ。何百年以上昔から既に何百と越える船や飛行機が消息不明となっている「魔の三角海域」だ。

これにはハリケーンや霧が多発し、ハリケーンに遭遇して遭難するケースが多い。

しかし、今の現状はこれとは全く違う。他にブラックホール説などもあるがこれとも全く違う。

レーダーや計量器などを狂わせるなど、霧やハリケーンとは関係ない。これは電磁波によるものだと思われる。

「バミューダにはまだ解明されてない事が多いが、この現象はどうなっているんだ！？」

メーターの針は左右に途轍もない速さで揺れ、レーダーはもう砂嵐状態で何も聴こえなくなっている。先程より酷い状態だ。

パイロットはまだジェット機は動いている事に気づく。スピードなどは分からなくても、このまま進んでいけばとりあえずこの海域を抜けるはずだ。そう考えるとパイロットは望みを捨てずに進んでいく。

すると、雲と雲の間に切れ間が見えた。出口かとそこへスピードを上げて進んでいく。

「ッ！？ 何ッ！？」

雲を抜けた先には大西洋の海……ではなかった。

巨大な大陸が宙に浮かんでいる。

横幅だけで数百キロメートルはあるであろう広さ。言葉では表せないほどの巨大さ。強いて言うなら、パイロットの視界が全て埋まってしまうそうだ。

大陸の上には層になるように高いビルのようなものが立ち並んでいる。一層、二層と上に行くほど幅が細くなっている。まるで山のように。

頂点には何百メートル以上もある巨大アンテナのようなものがそびえ立っている。

「うわぁー!」

パイロットはいきなりの事に操縦かんを上に向けてしまい、更に上空へと上昇してしまう。

そのジェット機は高度を越えすぎたせいか、そのまま海へと落下して行ってしまったという。

これが一ヶ月前、FM王が地球にやってきた少し後にバミューダラビリンズで起こった超常現象。その後、そのパイロットの消息は分からなくなったという……。

プロローグ（後書き）

お久しぶりの方はこんにちは　お久しぶりで〜す（*´、*）
初めましての方は初めまして〜（*´、`）ノ

というわけでシューティングスターです。ギリギリまだ1日なので
プロローグだけ投稿。え、短い？　これでも2時間かけたんですw
描写長く心がけるの難しいwww

前作とは微妙に書き方変えていますね。分かる人だけ分かればいいん
です！　イミフ

まあ始まりましたね、続編。アニメリメイク+　の続編。アニメ見
たことない方には是非見て欲しい！　見た方にも微妙に違うところ
を探して欲しい！　という目標ですね、今作は。え？　前作の目標
はあったのかって？　……とりあえず完結まで書く、ですw

私と初めましての方は前作を読むことをお勧めします。オリキャラ
もいるんで。まああまりでませんけどw

では、あまり長くなるのもあれですので、そろそろ失礼します

第1話 ムーの遺産（前書き）

よ、よ、よ、やく完成……！

今までより凄く長いので、悪しからず。

第1話 ムーの遺産

真夜中 コダマタウン

8月31日ももう直ぐ終わり、9月を迎えようとしている。学生にとっては学校が始まる嫌な日の少し前である。

勿論、ここコダマタウンにもそれは例外なく訪れる。

そんな訪れる寸前、8月31日の11時頃。コダマタウンの治安を守るサテラポリスのパトカーは夜の道路を駆けていた。

ウーーーーー！ ウーーーーー！ ウーーーーー！

4台程のパトカーは何処かへ向かっていく。

暫く進んで、ある大きな建物の前で急停止する。パトカーの中から十数人程の職員が急いで出てくる。手元には毎度御なじみの掃除機のような形をしたウイルスバキュームを持っている。

そのウイルスバキューム建物に向けて起動させる。

よく見るとその建物には電磁波のような稲妻がビリビリと走っている。

ウイルスバキュームを起動させて数秒後、頭にパトライトをつけた40代くらいの男性が出てくる。この職員たちの上司、五陽田警部だ。

五陽田警部は箱型の電子端末、スターキャリアをかざして、電子端末に建物を映してその建物を見る。

すると、今まで映っていなかったものが映し出される。

「電波ウイルスがうようよいやがる……」

電波ウイルス。電子機器などに発せられる電磁波を元にやっつく

るウイルスだ。このウイルスは電波障害や電波の妨害などの問題でよくとりあげられる原因の一つだ。

すると、五陽田警部はパトカーの中から2メートル弱近くある機関銃のようなものを取り出した。

「五陽田……それは……？」

20代くらいの1人の職員が、五陽田警部にその機関銃のようなものについて訊いてきた。この職員の名前は守護ライセンス。以前、ヘルケレスというFM星の宇宙人とFM王の野望を止めようとした一人である。

「これか？」

五陽田警部は、スコープを取り付けるような箇所に自分のスターキヤリアーを取り付けながら説明する。

「アマケン開発の新兵器」

そう言うと、建物の電波ウイルスが集まっている箇所の真ん中あたりに銃口を向け、一発撃ち放った。

ビューンという音共に白い光を発したそれは、多くのウイルスを巻き添えにして瞬間的に消える。デストロイ

五陽田警部はそれ一発では止めようとはせず、他の箇所に集まったウイルスに向かって何度も撃ち放つ。

「ふははっは！ 見たか！ サテラポリスの伊達男、五陽田ヘイジとは、ああ俺のことだあ〜！」

何処かの歌舞伎のように言い放った五陽田警部はウェーブスキヤ

ナーを通して更にウイルスを狙う。

よく見ると、建物から黄色い光を波をうつように放っているのが見える。が、五陽田警部は仕事とは関係ないため、それには気に留めなかった……。

次の日の午後 アマケン

今日は二学期最初の学校。そのため殆どの学校は午前中で終わってしまふ。

勿論、この街の学校、コダマ小学校も午前中で終わっている。

その小学校の生徒の1人、星河スバル。

星河スバルはいつもの赤い服にグレーの短パンを着て、頭に父の形見のビジライザーを頭に乗せて「天地研究所」通称「アマケン」と呼ばれるところに来ていた。

彼の父の後輩、天地守という男性がここの責任者で、その人にメールで呼ばれてきていたのだ。

とりあえず、天地に会おうといつも天地がいる司令室のような場

所に向かう。

ウィーンと司令室の自動ドアが開くと、案の定天地はそのフロアにいた。

「やあ、スバル君」

「こんにちは、天地さん」

天地はスバルに気がつくのと、軽く挨拶をしてくる。スバルも軽く返事を返す。

「早速だが聞いてくれ。コダマタウンの博物館に電波ウィルスが現れた」

「電波ウィルスが!?!」

天地はフロアにあるパネルを操作しながら説明に入る。どうやら、昨日の調査メモのようなものをそこに保存してあって、それを頼りにスバルに報告しているのだろう。

「昨夜現れた電波ウィルスをサテラポリスが退治したそうだ」

「でも天地さん……電波ウィルスはFM波、ケフェウスの帰還命令で一掃されたはずじゃ……だろ、ウォーロック?」

スバルは自分の持っているスターキャリアを覗いて質問をした。中にはオオカミのような姿をした電波体、AM星の宇宙人ウォーロックが腕を組んで考え込んでいた。

『……確かにそうだが。地球にまだ残党がいたようだな』

ウォーロックはそう推理する。そもそも電波ウイルス自体はFM星の産物であり兵器である。だが、FM王ケフェウスの命令に電波ウイルスは絶対である。なので帰還命令によりFM星に撤退していったはずなのだが。

「それが違うんだ」

「違うって?」

天地がスバルとウォーロックの考えを遮るように否定する。スバルが理由を訊くと天地はパネルを操作してモニターにいくつかの画像を映し出す。

「五陽田警部が研究用に残していたんだが」

そこに映っていたのは3体のウイルスの画像。

1体目はピラニアのような姿で赤色のウイルス、ピラニッシュ。

2体目は丸い装甲に覆われ、前方の一部分だけに大きな目があるウイルス、アイズ。

3体目は火の玉のような形をしながらも顔があり、手の部分には体の大きさにあった鎌を持っているウイルス、キルミィ。

この三体を見て、スバルはある事に気づいていた。

「……………初めて見る一電波ウイルスだ……………」

そう。今まではメットリオ、にモエローダー。ピリエース、クロツカー、モノソードなどが殆どだった。

『FM星にもこんな奴は居なかつたぞ』

ウォーロックの言葉からするに、この三体のウイルスはFM星で産まれたウイルスではないようだ。

「これは私の推測だが。この電波ウイルスは地球で誕生した新種のウイルスではないか、と思うんだ」

「地球の電波ウイルスってこと？」

「そう。まだ確信はないがね」

だが、有り得る事かもしれない。これだけ電波環境が急成長したのだ。何らかの突然変異で新種のウイルスが産まれても不思議ではない。

「そつだ。ウォーロック！ こいつ等の現れた博物館に行つてこよう！ 何か分かるかもしれない」

『そつだな。付き合つてやるつ』

何だか無愛想な返事だが、とりあえず軽くスルーすることにする。

「ところでスバル君。君の友達も今、アマケンに来てるはずだよ」

「え？ 友達？」

実験室

アマケン実験室。と言っても、それ程大きな実験はしていない。の割には意外と広いスペースの空間だ。

この部屋の天井、四方の壁の隅には何か電波を発している機械のようなものが取り付けられている。

そんなかなり広い部屋の中心あたりに、4人程の少年少女がスターキャリアーを片手に立っていた。

「マテリアライズ！ カレーライス！」

「マテリアライズ！ ラーメン！」

2人の少年の声が順番に部屋中に響いた。

最初に叫んだ少年は、普通の子よりは太っ腹な体型で、ガキ大将的な雰囲気を出している。服の真ん中にはフォークとナイフがプリントしてある。この少年の名は牛島ゴンタ。以前にFM星人オックスにとりつかれた少年である。

もう1人叫んだのは最小院キザマロ。背が低いのとメガネをしているのが特徴だ。

「焼肉！」

「お寿司！」

「ビビンバ！」

「お蕎麦！」

「ユツケ！」

「カツ丼！」

「キムチ！」

「鰻重！」

…… 2人で何か叫びながら逆立ちしたり、変なポーズをとったりしているが何の意味があるのだろうか……。

この2人の様子を2人の少女、金髪ツインテールの少女、白金ルナ。と水色の髪にハート型の髪飾りをしている少女、アイドルの水星亜夢。は無言のまま、変な行動を遠い目で見ている。

『違う違う違うーっ！』

すると、他の声が部屋中に響いた。見れば上の階から眺められるような窓が付いており、そこから不健康そうな男性、宇田海深佑が窓に顔をくつつけるように近づけながら叫んでいた。

その宇田海は叫ぶと、光の速さでゴンタ達の元へと階段を下ってやってきた。

「スターキャリアーはフードディスプレイじゃありませんっ！」

「だって、電波で何でも物質化出来るんだろ？」

「何カレーとか、何ラーメンとか、もう少し具体的な方がいいのかも！」

なにやらキザマロは色々間違っているような思考へたどり着いてしまったようだ。

「そういう問題じゃありません！ 食べ物以外でお願いします、食べ物以外で！」

大事なことなので宇田海は強調して二回言う。

ゴンタは下手な舌打ちをしたあとつまんねえと呟く。

すると、今度は白金ルナ。もといクラスの学級委員長は何かを考え付いたのかスターキャリアーを、強く握り締める。

「マテリアライズ！ 愛しのロックマンさ」

「皆着てたんだ」

「ッ！？ ロックマン様！？」

委員長が言い終わる前に後方から誰かの声が聞こえた。この声には委員長だけでなく、その場に居た誰もが聞き覚えがある声だ。

約1ヶ月と少し前。夏休みに入る前、声の主はFM星人と日夜地球を守るために戦っていた。

まさに英雄^{ヒーロー}。その名はロックマン。ウォーロックと共に星河スバルが変身した姿の事だ。

「あ、スバル君！」

しかしキザマロが名前を言うように、声は一緒なだけでそこに居るのはロックマンではなく星河スバルだった。

「なんだ、星河君なの……？ がっかり……」

委員長は言葉通り、溜息をつきながらがっかりとうな垂れる。

スバルはそれを向いて少し苦笑いを浮かべる。ここで少し傷ついたらと言わないでおく。

「委員長、何言ってるのよ？ スバル君はロックマンだって認めさせたじゃない」

不意に亜夢が何を今更という目で委員長に言う。

確かに、夏休み前の最後の登校日に委員長に「ロックマンの正体は星河スバル」と認めさせた。確実に。

キザマロの意味の分からない計画で「委員長が認めるまで亜夢を帰さない」という事になっていたので、亜夢は嫌々ながらも委員長に認めさせた。その時、亜夢は仕事で時間が押していたのだが、委員長が中々認めず、認めるまでかなり時間が経っていた。結局、仕事は遅刻という2文字になったのだ。

「いいえ！ 星河君がロックマン様だなんて認めません！ フンッ！」

そう言って委員長は皆とは逆方向にそっぽを向いた。瞬間、亜夢の額がピクツ動き、メラメラと何かが湧き上がってきた。

「ほほう……つまりあたしが割いたあの時間は無駄だったと……。それなのにあたしは仕事先に何度も平謝りさせられたと……」

何かの地雷を踏んだかのように、委員長に戦慄が走る。否、委員長だけじゃなくここに居た全員（宇田海を除き）にも戦慄が走っていた。

殺気。亜夢から出ていたもの凄い殺気に皆は後ろへと後ずさっていく。

「聞いて下さいよスバルくん！」

その状況を全く分かっていない宇田海が、この空気を引き裂く。

「スターキャリアの普及版を開発するにあたって彼等にモニターを頼んだんですが、全然協力的じゃないんです」

とりあえずスバルは話しを聞き、返事をするべく頭の中で話しを整理する。

「え、えーっと……電波の物質化ですよね？ で、でもあれは未完成のはずじゃあ……」

少し言葉に力が感じられないのは、まだ亜夢から出ている殺気に少し怯えているせいだ。

そんな事を見ず知らず、宇田海はふふ〜んと自慢げな顔をする。

「確かに、現実空間での実用化はまだ無理です。でも、この特殊な電波空間！」

そして一拍間を空け続ける。

「宇田海エリア（仮）^{カッコカリ}の中では可能なんですよ！」

「宇田海エリア（仮）……？」

スバルが聞きなおした後、委員長、キザマロ、ゴンタの順で言葉を
をつなげて行く。

「宇田海エリア……」

「かつこ……」

「仮……？」

「……ツッコンでもいいの……？」

ただでさえイライラしている亜夢は、この宇田海の言葉に今にも
溜めていた何かが爆発しそうだった。

『亜夢ちゃん。落ち着いて？』

亜夢の目の前の空間に黒い穴が開き、その中から着物を着た電波
体が現れた。

その電波体の着物は白がベースで、所々に水色と赤で染めてある。
電波体の長い髪のようなものは簪で束ねて留めており、残りを後ろ
に垂らしている状態に見える。まさに大和撫子といえるべき姿をし
た電波体。

名前はジャスミン。れっきとしたFM星の宇宙人で、亜夢のパ
トナーである。

「止めないで、ジャスミン……」

亜夢はそこで言葉が詰まった。何故ジャスミンが目の前にいる？と。

『ほう、実体化ねえ？』

すると今度はウォーロックが委員長、ゴンタ、キザマロの後ろに黒い空間から現れた。ウォーロックは右手でゴンタの頭、左手でキザマロの頭をガシツと驚づかみにした。

「むぎゅー！」

変な声が出ると共に、ゴンタとキザマロは自分の両手を使ってウォーロックの手を頭からどかした。つまり、電波体に触れたのだ

「脅かさないでよ、ウォーロック！」

「もーっ！」

『ハッハッハッハ！』

キザマロと委員長の驚いた顔を見て愉快にウォーロックは笑い飛ばす。

とりあえず、今のこの空間の情報を整理する。

マテリアライズ、つまり電波を使って創造するので、その分このエリア自体が電波空間に近いものになっているのだろう。そのため電波体との周波数が合いやすく、電波体にとっても活動しやすい空間なのかもしれない。勿論電波じゃないものにも触れられる。

「はっはっは。百聞は一見にしかずです！ 見ててください！」

宇田海そういうと、ズボンのポケットから一台のスターキャリアを取り出した。

すると、マテリアライズ！雨傘！と言って宇田海はスターキャリアを天にかざした。

瞬間、手に持っている部分より下の方が柄となり、上の部分が傘となる。

「はっ！」

宇田海は傘を開いて円を書くように大きく回して方に掛ける。そして開いた左手を前に向けてさらに首を回して顎をシャクレさせて。

「あゝ、どんな〜ものですよ」

と、まるでどこかの舞台の歌舞伎のようなポーズをとる。

ウォーロックは、そんな何も気づいていない様子の宇田海の肩をチヨンチヨンとつつく。

「はい？」

『皆行っちゃったぞ』

ウォーロックが指を指した先にはほんとに誰もいなかった。

瞬間、部屋中に「うそー！ー！ー！？」という裏返った声が響いたのだった。

空港

コダマタウンの端にあるとある空港。

今この空港の滑走路に一台の飛行機が着陸した。普通より小さめの飛行機のようなが、自家用なのだろうか。

その飛行機は停止するとともに、ドアが開く。中に乗っていたのは、黒い服を着てサングラスをつけ、頭の黒髪が角のようになっていた女の集団だった。

中からその集団が数十人に程階段を使って降りてくる。女達は階段にそつた一本道の両脇に立ち並ぶ。まるでメイドが主人を出迎えるように。

すると、最後に飛行機の中から1人の男が降りてくる。

男はメタボであるう体型。両手の指全てには金の指輪をしており、いかにも高価な服を着ている。少し目にはクマができており、顎には髭も生やしている。

その男は口を少しあけてニヤツと笑った。左の犬歯は金歯になっており、それがキラキラと光っている。

ある船の倉庫

ユラユラと揺れる船の薄暗い倉庫の中。そこには色んな荷物が積み込まれていた。

だが、その中には何故か一つだけ、棺桶が置かれている。

すると、その棺桶はゆっくりと開き始める。ギギギツと不気味な音と共にゆっくりと開いていく。

中には男が入っていた。黒い服を着ているが、喪服とは全然違い、サーカスの団長が切るような服だ。その男は黒いシルクハットを被り、後ろには三つ編みに編んでいる金髪があり、右手には鳥の頭のデザインの白い杖を持っている。

「……………ニホンか……………」

男は低い声で呟いた。

コダマタウンの博物館

昨日ウィルス事件があつた建物。

スバル達はアマケンを後にした後、博物館へとやってきていた。昨日事件があつたにも関わらず、結構な人が博物館の中へと入つて行っている。

スバル他のキザマロたちはなにやら博物館に展示されている物について話している。もっともこの場合はキザマロが一方的に喋っているだけのようだ。

それと、亜夢は帽子を被って髪を隠し、サングラスを掛けて変装している。一応アイドルなので、騒がれると何かと面倒なのだ。

「ッ。おい、スバル。ビジライザーを掛けてみる」

突然。ウォーロックがスターキャリアーの中からそう言うってくる。スバルは一度理由を聞いたが、いいから！と言って答えてはくれなかった。仕方なくスバルはビジライザーを掛けてみる。

「……ッ！ 何だ、あの光はっ？」

掛けてみたところ、建物の屋根から2、30メートル程高くまで伸びている黄色い光があった。

否、ビジライザーを掛けた事で見えているのだから、電波といったほうが良い。

とりあえず建物の中へと入るスバル達。

先程の電波は博物館の中にまで伸びている。伸びている場所にはガラスケースがあり、人が取り囲むようにそれを見ている。

殆ど隙間ないぐらい人が集まっているため、そこに何かあるのかスバルには分からない。そのため、大人より小さい体を利用して、人だかりをかき分けていく。

「す、すみません……！」

見えるところまでスバルはかき分けてやってくる。

ガラスケースの中には西洋の剣の様な姿をした灰色の石が飾られていた。これが電波を発している正体のようなのだが。

その石が飾られている所にはこう記されていた。

「Sword of Berserk
ベルセルクの剣 ……？」

ベルセルク。神オーディンの神通力をうけた戦士。神話では鬼神ごとく戦ったと言われている。

暫くするとスバルの元に亜夢が人込みをかき分けてやってくる。

色々見て回った後、最後にこの場所に来たようだ。

「？ さっきからビジライザーで何見てるの？」

小首を傾げてスバルに訊く亜夢。

すると、腰あたりから自分のスターキャリアーを取り出した。これにはスバルのビジライザー同様に電波世界を見ることが出来る。

亜夢はそれを介してガラスケースの中にある石を見た。

「ッ!? 何コレ……」

亜夢は驚きを隠せなかった。まあ誰でもそれを見て驚かすにはいられないだろうが。

「石……だよね……?」

亜夢の質問にスバルはコクツと頷いた。

その瞬間、建物内の電気が消えた。

「コツ!?」

あらゆる照明は一瞬にして消え、あたりは暗闇に包まれてしまう。よく見ると、照明の所々に電気のようにビリビリと電磁波が走っているのが分かる。

しかし、それだけで建物内はパニックになり始めていた。

すると、建物の天井から電波ウィルスが数十体すりぬけて降りてきた。周波数を変えてきたのだろう。

「電波ウィルスだ!」

ゴンタがそう叫んだときには、委員長とキザマロは既に非難し始めていた。キザマロはゴンタの右手を即座に掴んで引っ張っていく。

「ゴンタ君早く！」

「え、スバルはっ？」

スバルは何処にも居なかった。建物内に出現したウィルスを退治しに向かっているのだろう。

ゴンタは何処に行ったのか質問したが、回答は返ってくる事はなくキザマロがゴンタを引っ張っていった。

後ろから亜夢が付いて行っている。亜夢のことだから、いつもならスバルに付いていきたかっただろう。

だが、委員長達に付いて行っているということは「心配だから付いていて欲しい」とスバルに言われたのだろう。

その頃スバルは建物内の階段を使い、2階に移動していた。

ここは一番天井に近く、その分ウィルスの数が多い。だが、誰一人として人は居ない。

そのため変身してもロックマンの正体がスバルだとバレる心配もないのだ。

スバルは念のために誰もいないか確認を取ると、スターキャリアーを天に掲げた。

「電波変換！ 星河スバル オン・エア！」

黄緑色の光に包まれ、中から青い姿の戦士が現れた。

これが世界をFM王の魔の手から救った戦士、ロックマン。

変身後ロックマンは周波数を変え、先程のガラスケースの近くに場所を変えた。

2階から確かにウィルスは居たが、全員このガラスケースに向かっていた。狙いはそれだろう。なので、チマチマー体ずつ倒すより

まとめて倒したほうが効率だと踏んだのだ。

『昨日の電波ウィルスはあの剣の出す波動に誘われたようだな』

案の定ウィルスはガラスケースの前に群がっている。

ロックマンは左手のウォーロックを一度上に向け、スターキャリアーに内臓されているバトルカードを^{フレージョン}転送する。

「バトルカード！ エアスプレッド！」

左腕をエアスプレッドへと変え、ウィルスに向けると1発だけ放つ。

弾は一体に当たった瞬間、周りへと拡散し一度に十数体のウィルスをデリートしていく。

しかし、完全にデリートできるわけでもない。さっきよりは数は少なくとも、数体程度の請ってしまう。

そのためロックマンは左手をエアスプレッドからソードへと変えた。残りのウィルスをそのソードで切って、デリートする

ドゴォーン！！

筈だった。

ロックマンがウィルスとの間合いをつめようとしたところ天井が碎け、瓦礫が落ちてきてその時に巻きあがった瓦礫の粉が舞い、前方が見えなくなった。

舞っていた粉が晴れていくと、そこには誰かが立っていた。

「間違いない。本物のオーパーッだ」

常人より2回り程大きな巨体な男、電波人間。体格はゴリラにも

近く、色は白色だった。

男はベルセルクの剣が入っているガラスケースを既に壊していた。その中から右手の人差し指と親指でつまむようにベルセルクの剣を取り出す。

『何者だ、アイツ？』

ソードの形態からいつもの姿に戻ると、ウォーロックは言った。だが、それに男は答える訳もなく、ただ一言ことう言っ。

「ベルセルクの剣は頂いた！」

まさに泥棒のような言葉だ。

その男はそれを言い残すと先程穴を開けた天井に2、3メートル程ジャンプすると、周波数を変えて姿を消した。

「待て！」

『剣のオーラが消えたぞ！』

「行くぞ、ウォーロック！」

『おお！』

返事を聞くと、ロックマンもあの巨体の男同様に周波数を変えて後を追って行く。

コダマタウン上空のウェーブロード

街の上空に結構な数の電波が飛び交っている。そのためウェーブロードもかなりの数がある。

その中の一つのウェーブロードに巨体の男は周波数を変えて現れた。

男は逃げ切れと安心し、左手でつまんで持っているベルセルクの剣に視線を落とす。

「これで俺も　　ッ!？」

眩き掛けた途端、空から怒濤オウゴウの銃弾の嵐が降り注いだ。

なんとか持ちこたえる巨体の男。銃弾の嵐が治まったあと、直ぐにそちらの方に視線を向けた。

巨体の男が立っているウェーブロード数メートル程上のウェーブロード。そこには違う背の高い電波人間が立っていた。

黒い杖に黒マント。そして黒いシルクハットを被っており、そこから三つ編みの金髪が4本ほど束ねられている。

「ベルセルクの剣はこの私ワタシが頂きましょう」

そう言って左手で持っていた杖の柄を右手にチンツと音を立てるように一度置いた。

「ぶはっはっはっは、笑える冗談だ！ 何処の誰だか知らねエが、奪えるモンなら奪ってみやがれ！」

巨体の男は左手にあるベルセルクの剣を揺らして挑発する。

それを見て、もう一人の男はニヤリと口元を歪ませた。本気でやっつていいんだな、と言うように。

と、その時。

「見つけたぞ！」

巨体の男の後ろから声が聞こえた。

先程追って行ったロッキマンだ。

「博物館から盗んだものを返せ！」

それを見て、巨体の男は少し笑う。

「それは出来ねエ相談だな。ガキは引っ込んでろ！」

もう一人の男は静かに、冷静に言葉を吐く。

「そう、私の方が先約です。ファントムクロー！」

男の胸のあたりからから黒い手が現れた。否、その名のとおりツメが鋭くなっている。

その黒い手は、一直線に巨体の男に突っ込んでいく。

「ユキダマフォール！」

それに対して、巨体の男は上空から雪玉を数発降らせる。

その雪玉は黒い腕にいくつも落とし、ぐねぐねに腕が曲がる。

それに引つ張られるように男は前に体が動く。流石にこのままではウエーブロードから落ちると思ったのか、腕を断ち切った。

だが、その時には既に巨体の男はそこにいなかった。

数メートル高い場所にジャンプし、次の攻撃に入ろうとしていた。

「ナダレダイコー！！」

胸を両腕を使って叩き、音を鳴らす。すると、巨体の男のより上空から雪崩のように雪が勢いよく流れていく。

対して、もう一人の男はマントを右手で掴み、体を捻らせて引く。

「フロントム、スラアアツシュ！！」

そして引いた分だけ体を回転させ、途轍もない風圧を起こす。

風圧と雪崩がぶつかりあい、広範囲に爆発が起きる。否、殆ど爆風しかないかもしれない。

ロックマンはその爆風に吹き飛ばされそうになるが、なんとか持ちこたえている。

「くっ……あつー！」

すると、ベルセルクの剣が下のコダマタウンの市街に向かって落ちていく様子が見えた。

それを直ぐに気づいた長身の男は直ぐにベルセルクの剣の追って降りていく。

「貰った！」

「ッ！ しまった！ 渡すか！！」

それを追って巨体の男も下に降りていく。

そして、ベルセルクの剣を渡すわけにもいかないロックマンも周波数を変えて飛び込んだ。

ベルセルクの剣は徐々に速度を加速していく。

それは2人の男も同じだ。右に巨体、左に長身の男。両者ともほぼ同じ高さにいる。手を伸ばしているがあと少しの所で届かない。すると、その落下してくる2人よりも早く降りてくる青い戦士。

「お前たちに……渡すもんか！！」

ロックマンは2人よりもベルセルクの剣に近い高さだ。今なら手を伸ばせば届くはず。

とつさに、左手のウォーロックを前に出した。

「掴め、ウォーロック！！」

「任せろお！！」

口で少し掴むだけで良かった。

だが、ガブツと掴んだつもりのベルセルクの剣は、一口丸呑みにしていた。

「『ッ！』……！！」「」

これには呑みこんだウォーロックも驚いていた。

そして、地面に足が付くロックマン。

ウォーロックからはベルセルクの剣から出ていた電波の波動が不規則に放たれていた。

だが、暫くすると、ウォーロックの口の中に吸い込まれるように消えていった。

『う……お……。呑じまった……』

目が点になっているウォーロックは恐る恐る声を出した。

「早く吐き出してよ」

何の素っ気無く言うロックマン。

とりあえず、喉まで戻して出そうと、タンを出すような感じ（電波体にもタンはあるのだろうか）で喉を鳴らす。

『かーっ、かーっ……！……駄目だ、出来ねえ！！』

「ええー!?!」

今度は相当なリアクションで。

その頃2体の電波体は直ぐ上のウェーブロードに着地した。

「やれやれ。面倒な事を……」

「改めて出直すか……」

長身の男と巨体の男はそれだけ残すと周波数を変えてこの場から立ち去った。

もっとも、2人は別々に帰って行ったようだが。

『どうしよう……スバル……』

いつもより気が弱い声のウォーロック。弱気すぎるのが気持ち悪いぐらいだ。

だが、スバルにどうこうできるわけもなく、ただ時だけが過ぎていく……。

第1話 ムーの遺産（後書き）

はい、言い訳タイム。

木曜日、3文1完成。金曜日、高校生クイズ見てたためorz。土曜日、ちよつと。今日、完成（無修正）。

いやあ、こんなに長くなるとはねえ。あ、無修正なので誤字、脱字、矛盾点色々あると思います。

じゃ、じゃあそろそろ眠たいので……

第2話 ムーの封印 前編(前書き)

とりあえず、更新遅れてすみませんm()m

テストやら体育大会の練習のせいでやる気があんまり湧かないは、
駄文になるはで上手くできなかつたんです(ノ、)()・

第2話 ムーの封印 前編

スバル宅

ロツクマンこと星河スバルは、とりあえずウォーロツクが飲み込んだベルセルクの剣をどうにかする必要がある。そのためとりあえず自宅へ場所を移そうと、家の前に周波数を変え現れた。

スバルは玄関の前で電波変換を解き、スターキャリアを覗いてウォーロツクを見る。

「兎に角飲み込んだものを吐き出すんだ」

『あ、ああ………』

気の弱い返事をするウォーロツク。大丈夫かなとスバルは思うが、吐き出せるかどうかはウォーロツクの頑張り次第だと思う。

玄関のドアを開け、2階へ移動しようとまず廊下を通る。別に、ウォーロツクの事をリビングにいる、母のあかねに内緒とかそういうわけではない。寧ろスターキャリアに移した数日後、夏休みに入って直ぐにウォーロツクの事について話しているので問題は起こらない。父、大吾の事も。流石にロツクマンのことまでは話していないが。

だが、やはり事件関わりそうなので、あかねに心配させたくないのだ。

スバルはただいまを言うと2階の階段を上ろうとした時。否、正確に言うと上って行くこととしたら。

『お帰りブク〜』

「はあ？」

聞き覚えのある声が、直ぐ下の廊下から聞こえた。

直ぐ様振り返ると、背の低いカニが居た。カニはリビングへ通じるドアを開けるとリビングの中へと入っていった。何だかエプロンを付けて、新品の蛍光灯を持っていたような気もするが……。

とりあえずスバルもそのカニを追ってリビングへ向かう。

ガチャツと扉を開けると、リビングにあるソファに誰かが座っていた。ピンクのパーカーを着ている女の子だ。隣には一緒にスターキャリアー内臓のギターが置いてある。

実はギターは元々はトランサー内臓だったのだが、ある事件で壊されてしまったので新しくスターキャリアー内臓のギターを作って貰ったらしい。

「あ、スバル君。お邪魔してま〜す」

彼女は国民的アイドルの響ミソラだ。琴型のFM星人ハープと一緒に地球のために戦ったスバルの友達なかまである。

因みにハープはギターの電磁端末の中に居るようだ。

「この前のお礼にきてくださったのよ」

直ぐに母のあかねが台所からおぼんにお茶を乗せて持ってくる。

ついでにケーキも乗っているがミソラの分しかなく1個しか乗っていない。

「お母様に怪我の手当てをしていたでしょう」

FM星人ジェミニ、アンドロメダとの最後の戦いの時。ミソラはハープと電波変換しジェミニ・スパークと戦ったときに右足を軽く

ねんざしたのだ。怪我とはそのことだろう。

「それは良いけど……」

スバルは左を向いた。

台所のあたりに脚立が一台立っている。その上にはエプロン姿の赤いカニがいる。

手が天井の蛍光灯に近いことから蛍光灯の交換を行なったのだろう。

あのカニは何処かで見ることがあるようなとスバルは考える。

『ふう、これでよしと。交換できたブク、スバルママー』

するとそのカニはこちらに向かってゆっくりと降りてきた。

キャンサー・バブル。FM星人キャンサーが電波変換装置を使って電波変換した姿。とスバルは思い出した。が、何故ここに居るのかは未だに不明。

「ありがとう。助かったは、キャンバブちゃん」

「キャンバブちゃん？」

「今度私の付き人になったの」

付き人？とスバルは訊きかえす。

要するに、キャンサー・バブルはミソラの身の回りの世話をするということなのだろう。

あのハープ・ノート嫌いだったキャンサー・バブルが付き人になるとは……正体がミソラだと知ったらこうまで変わるのだろうか。

「とつても気が利くのよ」

『そ、それ程でも。他にお手伝いはあるブクか？』

お世辞気味た言葉を聞いて照れるキャンサー・バブル。あかねに乗せられた感がある言葉を言うが、決してあかねが意図的に言ったわけではない。偶然だ。

「うーんっと……実はフードディスプレイが」

『お安い誤用ブク！』

まだ最後まで言っていないのにキャンサー・バブルはダッシュで台所のところまで向かっていった。

ところでスバルは何かを忘れているような気がする。

『おーい、スバル……』

「ッ、しまった！ ウォーロックのことを忘れてたあ！」

スバルの部屋

数分後。

ミソラをベッドの上にくつろがせ、自分は机の前の椅子に座る。スバルはとりあえず、ムー大陸、ベルセルクの剣についてわかる範囲で全て話した。

「ふーん。ムー大陸ってほんとにあったんだあ。あたし単なる伝説だと思ってた」

伝説と思っけていても無理もないだろう。今までどんなに情報量があつたと言つても、ほんとにあつたと確信のあるものはなかつたのだ。確信がなくては伝説であつてもしょうがないと誰もが思うだろう。

しかし、問題はそこではない。

「でも、その剣」

「ベルセルクの剣……」

狙つてきた者が2人。狙われた限り、何らかの価値がある物には違いない。

ムー大陸の遺産と言つても、ただの金銭物なのか。それとも、なんらかの力を秘めているのか。まだなんともいえない状況だ。

『いでででででででッ！！！』

「ッ！」

いきなりウォーロックの叫び声が聞こえた。何がどうしたと、スバルはビジライザーを掛け、ミソラは腰から予備のスターキャリアを取り出す。ミソラはもしもまた壊されてしまったときようのため予備を持っているようだ。

電波空間を見てみると、ハーブが短い右手でウォーロックの顎を下げ、キャンサーが上あごを両手で引っ張って口の開きを全開にしている。その開いた口の中にハーブは空いている左手を押し込んでいる。

『うーん、やっぱり届かない……』

『ほふあうにあふあああ！……！』

『ツッ！！ キヤツ！ノブクウー！』

言葉になっていないウォーロックの怒号と共にハーブとキャンサーは吹き飛ばされた。

流石のウォーロックも、あれでは怒るに決まっている。というか苦しい筈だ。

『ああ〜いてえ。もう少しで顎が外れるところだった……』

やはり電波体にも顎の骨と言うものがあるのかとスバルは適当に思う。

ウォーロックが右手で顎に触れて向きを整えるような仕草をとると、キャンサーが駄目ブクかーと言っている。

《何やってるミソラ！！》

すると、ミソラの子備のスターキャリアーに電話が入った。

この声はマネージャーの金田のようだ。

《今何処だ！ とっくにスタジオ入りへの時間だぞ！》

電話の向こうでは自分の腕時計を指差して強調させているのだが、全く針が見えないことは黙っておく。

ミソラは右手を敬礼のような頭の近くにやると適当に返事をする。

「ほーい、直ぐ行きまーす」

《おいカニイツー!!》

『ブクツー!!?』

いきなりの呼び出しに愕然と驚くキャンサー。

金田は続けてキャンサーに言葉を畳み掛ける。

《何のためにミソラにお前がついているんだっ!? この役立たずっ!! お前なんか首だっ、首い!!》

『そんなあゝ!!』

キャンサーは涙を流しながら嘆いている。

ミソラがスターキャリアーからは見えないように、キャンサーにごめんと手を使って申し訳なさそうに謝っているのが見える。

そんな中、ハーブは再びウォーロックの口を全開にして口の中の探索をしている。

数十分後

とりあえず、天地にウオーロックの体内で起きている異変を調べてもらうためにいつものようにコダマタウン市街を歩いて向かう。因みに数分前にミソラはキャンサーと電波変換して仕事場に向かっていた。

『くそお、まだ顎がいてえ………！』

スターキャリアーの中からウオーロックが呟く。先程のことをうらんでいるのか、若干怒りをこめて言ったようにも聞こえる。

「兎に角天池さんに見てもらおうよ」

スバルがスターキャリアーを覗きながら心配そうに言う。すると、スターキャリアーに視界を傾けていたせいか、前から人が近づいてきていることに気づいていなかった。気づいたときには既に遅かった。完全に前から来た人とドンツとぶつかった。

「あ、すみません！」

ぶつかった相手は近くのコダマ高校の制服を着たスバルより少し

背の高い女の人。所謂女子高生だ。

制服はセーラー服ではなく高校指定の制服に赤く細いネクタイをして、白に近い灰色のスカートを履いている。高校の夏服だろうか。

「おう、今度からは気をつけるよ」

女子にしては少し男勝った口調に、かなり高めのテンション。

女子高生はスバルにニツと笑顔を見せると後ろに振り返った。カバンを持っていた右手の甲を肩にあててそのまま歩いていく。

「放て、心に刻んだ夢を未来さえ置き去りにして」

暫くの間スバルはその女子高生の背中を見つめていた。

途中、何かの歌をボソツと口ずさんで行ったのが聴こえた。何かのアニメの歌ような歌詞に聴こえたのだが……。

『おい、スバル』

「あ、ごめん……」

直ぐに視線を戻し、スターキャリアーのウォーロックに詫びを入れる。

すると、今度は車のクラクションの音が聞こえた。

後を振り返ると、見覚えのあるパトカーが後ろから真横にやってきていた。

「ん？」

スバルが小首を傾げると、自動的に車の窓がゆっくりと開いていく。

向かいの運転席に見覚えのある頭にパトライトをつけたおじさんがいた。

サテラポリスの五陽田警部だ。

第2話 ムーの封印 前編（後書き）

一人目のオリキャラ登場です！ と言っても、前作の最後に出てきた子とは違いますけどねw

とりあえず、また長くなりそうなんで切りました。次回はこれより少し長いと思います。

あ、オリキャラが口ずさんだ歌は知っている人が多いですかねw いや、ほんとはボカロ曲って設定だったんですけど、ボカロほんと知らなくてw 初音ミクが色んな歌を歌うってぐらいしか……いろいろすみませんです、はい。とりあえずボカロ勉強してから口ずさむとこ変えますね。（いつになるか分かりませんがw）

とりあえず、明日、明後日休みのない私は体育大会という「何それw」みたいなイベントに参加するので土日に変更はないと思ってください、はい。っていうか、今日、日に焼け過ぎて凄い黒い（そして顔の日焼痛い）……私白い方がいいのにorz

第3話 ムーの封印 後編(前書き)

どうも、遅くなってすみません。>< ;

第3話 ムーの封印 後編

スバルはサテラポリスの五陽田警部にある場所へと連れてこられた。

パトカーの中から見た限り、中心にソーラーパネル付きの大きな校舎。周りにも校舎があり、そのどれもが風力発電用の風車が付いている。

「……デンサン大学？」

コダマタウンの中心と言って良いほどの場所にある大きな大学。確かここには、宇田海が発明した未完成のマテリアライズを完成へと導いた科学者がいるといわれている。

完成と言ってもまだ宇田海エリア（仮）の中での話だ。実用化にはまだ程遠いとの事。

そんな大学にスバルを連れてきたのは何故だろうか。スバルがシートベルトを外しながら五陽田警部に訊いてみると。

「お前を大至急デンサン大学へ連れて行けと上からの命令だ」

僕を？とスバルは聞きなおす。

が、五陽田警部からその答えが帰ってくる事はない。

「兎に角俺の役目はここまでだ」

答えが返ってこない代わりに、スバルが座っている席を跨いで助手席のドアのロックを手動で開ける。

「えっ、一緒に来てくれないんですか？」

「そういう命令だ。俺はこれ以上介入できん」

ドアのロックを開け終わると元の体制に戻りながら更に付け加える。

「大一俺は急がしいんだ。博物館から盗まれた、ムーの遺産を探さねばならんしな……」

『ムゴフツ！』

「ツッ！！　ゴホンツ、ゴホンツ！」

ウォーロックの声がスターキャリアーの中から聞こえた。

流石に今のじゃバレると思ったスバルは咳込んで誤魔化してみる。誰がどう見ても演技だと分かっってしまう下手さだ。自分でもそれは分かっている。

だが、これしか方法がない。このまま気づかれないままドアを開けてパトカーの外へと逃げるように出る。

五陽田警部から逃げるように。

「風邪かあ？　気をつけるよ」

……反応的にはこれであっている筈。だが、普通あんな下手な演技をすれば分かるはずであろう、ふつうの人ならば。

意外に五陽田警部は鈍感だったのだろうか……。

兎に角気づかれてないようなので、スバルはそれをスルーしてドアを閉める。

「じゃあな……」

五陽田警部はスバルからの返事を聞かぬままエンジンを掛けてどこかへと出発してしまった。

スバルは数秒ほどその後を見送る。

『やれやれ、またお尋ね者か……』

「うん、早く剣を吐き出さないかね」

ウォーロックのうんざり声が聞こえたので、スバルは腰にあるスターキヤリアーを取り出す。

スターキヤリアーに視線を落とすと中にいるウォーロックに苦笑いをして言うスバル。

見送った後、この後どうすればいいのかわからなくなった。

しかも、大学がスバルに何の用があるのか未だに分かっていない。もし父、大吾の行方が分かったのなら、アマケンから連絡が来るだろうし。大一デンサン大学が宇宙方面に興味があるかも分からない。

『星河スバルさん？』

そんな事を考えていると、不意に澄んだ低めの声の男性が声を掛けて来た。

はい、と急いで返事を返し、声を掛けられたほうに視線を向ける。

「ッ！」

男性は2メートル程の長身で、どこかの国の昔ながらの民族衣装を身にまとっている。顔もそれにちなんで衣装の一部で隠している。

『お待ちしておりました。こちらへ……』

その男性はスバルに付いて来させる様に先頭を歩いていく。

「び、ビツクリした……」

ホツとしてスバルは息を着いて呟いた。

胸を撫で下ろし、少し落ち着いていたところで先程の男性の後を付いていく。

スバルは大学の広い教室に連れてこられた。

中はどこにでもある大学の教室。長机に数人ほど座る事が出来る長椅子が、縦に2列。横8列程度おいてある。教卓奥にはホワイトボードのの代わりにモニター置いてある。

スバルはその右の列の4列目。中心に近いところに座らされた。

今日は平日なのだが誰も大学の生徒という人はいない。恐らく午前で授業は終了したのだろう。

しかし、人が誰もいないと妙に緊張してしまう。気づけばさっきの男性もいなくなっているようだ。

「何だか緊張しちゃうね」

少しばかり心細くなってきたのでウォーロックに話しかけてみる。ウォーロックからはそうか?としか返ってこなかったが、それだけ

でも十分緊張はほぐれた。

すると、急にあたりが暗くなった。

今まで点いていた照明が消えたようだ。

と、同時にモニターに映像が映しだされた。

「なんだろう？」

『なんか、遺跡のような建物が並んでるなあ』

映し出されたのは上空から撮られた写真のようだ。

ウォーロックが言うように、ビルのように大きな古代の建物が立ち並んでいる。

他にもウエーブロードらしき黄緑色の道の写真もある。

そんな事を考えていると足音が聞こえた。

「約1万2000年前、繁栄を極めたという伝説のムー大陸……」

白衣を着た白い肌の女性だ。後ろの方で髪をダンゴに丸めて簪で止めている。

その女性はゆっくりと階段を降りながら、スバルの元へと近づいてきている。

「ムー大陸？」

スバルは近づいてくる白衣を着ている女性に訊きかえす。

女性はモニターに映し出されている写真の事について話し始める。

「その写真は1ヶ月前。FM王が地球に接近した、その同時刻。某国の監視衛星が太平洋上空でとらえた映像よ」

ゆっくりとスバルの近くまでやってきた女性は説明をそこで止める。

「私の名はオリヒメ」

「オリヒメ……さん」

「初めまして、星河スバル君。いえ」

オリヒメと名乗るその女性はそこで一呼吸置いて、口を開く。

「ロックマンと呼ぶべきかしら？」

「ッ……！」

驚愕しているスバルに、更に言葉を足していく。

「あなたの活躍は良く知っているわ。今日博物館であった事件もね」

さつき起きたばかりの事件まで知っている。という事はかなり凄
い情報網があるのだろうか。

スバルがそう考えている間、オリヒメは更に話しを進めていく。

「だからこそ、あなたに来てもらったの。ウオーロックも宜しくね」

「ッ……！」

『何っ！　なんで俺のことが……！』

「あなたのビジライザーと同じ、特殊なコンタクトレンズよ」

オリヒメは難なくそれに答える。

このオリヒメはどんな情報網を使っているのだろうか。

スバルがロックマンだという事も知っている者はほぼ小数しかないはず。それに加えてウォーロック、ビジライザーの存在まで。

しかもそれに加えてビジライザーと同じような特殊なコンタクトまで持っているとは。

……今の状況じゃ何も分からない。とりあえずスバルは、一旦話しを戻す事にする。

「一体どういうことですか？ ムー大陸だなんて。何で今頃FM王ケラエウスの話が出てくるんです？」

オリヒメは一度間を置いて、息を吸うと答え始める。

「……FM王が地球に接近したあの日。FM王の強大な電波エネルギーがムーの封印に影響を与えてしまった」

「ムーの封印？」

「説明するわ。かつてムー大陸は、その超科学であらゆる電波を支配し、自在に操る事で現代を遙かにしのぐ高度な文明に気づき上げた。ムー大陸では、人間と電波体とが共存し、丁度あなたとウォーロックのように電波変換が日常的に行なわれていたのよ」

「電波体だと!？」

「地球にも電波生命体が存在していたんですか!？」

オリヒメは一呼吸おいて答え始める。

「今でも時々目撃情報がある、UFOやUMAと未確認生物もムーの電波生命体の生き残りだと思われるわ」

スバルはこの話しに感心したように息を吐く。
となると、ムーの科学力は本当に相当なものだったと考えられる。

「頂点を極めたムーの超科学は、地球の電波環境を掌握するつもりで最後に究極の電波生命体を誕生させた」

白衣のポケットからモニターのリモコンを取り出し、映像を変えた。
た。

遺跡の中から見つかった、ある石碑のように見える。

「それは人間に作られたにも関わらず、自分を神だと名乗り始めるムー人は、地球を破壊しかねないその力を恐れ、ムー大陸ごと封印する事にしたの。私たちとは異なる別次元の電波空間へ……」

スバルとウォーロックは息を呑み込む。
オリヒメは構わず話しを進めていく。

「でもその封印が僅かに緩み、ムー大陸はほんの一瞬、我々の現実空間に垣間見せた……」

「ケフェウスの影響でそんな事が……」

友達^{ブラザー}が地球へやって来たことでこんな事がおきている、と思ったスバルは正直驚いた。

確かにFM王、ケフェウスが放っている電波は敵に回すと脅威になる程の物だ。

しかし、それはケフェウスの意思でやっているわけではない。無意識、と言うより彼の生まれつきからの能力。電波と同時にFM王特有の電磁波を放っているのだ。それがムーの封印を解く鍵となったのだ。

スバルは信じたくなかった。友達がそこにいただけでこういう結果を生んでしまった事が。

「その時、一緒に封印されてた電波生命体と電波ウイルスが目覚め、私達の世界に紛れ込んだのよ」

オリヒメは話しを進めていく。
ウォーロックはそれを聞いて何かを思い出したかのように声を発した。

『そうか！ 博物館に現れた電波ウイルス……それとあの連中も』
そこでオリヒメは映像を変えた。
昼間ベルセルクの剣を奪いに来たゴリラのような巨体な男の映像だ。

「そう、イエティ・ブリザードと」
更に映像を変える。

今度はもう一人のシルクハットを被った長身の男の映像だ。

「ファントム・ブラックよ」

『イエティ、……ブリザード……』

「ファントム・ブラック……」

「ムーの電波体が、現代いまの人間と電波変換した姿よ。残念ながら、人間の方はまだ調査中だけど」

スバルはここで疑問に思った事がある。

何故彼らは博物館のベルセルクの剣を狙ったのだろうか。

その事をオリヒメに訊いてみると、

「ムーの封印を解くには3つのオーパーツと呼ばれる鍵が必要な。
その一つはウォーロック。あなたが呑み込んだベルセルクの剣よ」

そう返ってくる。

ウォーロックは自分の右手を喉元に当てた。先程呑み込んでしまった剣は口からは見えないところ。つまり、腹の中へ喉を伝っていったようだ。

オリヒメは話しを進める。

「神とも言うべき究極の電波生命体の力を、己の欲望や悪事に理容するために。でも、彼らは本当の究極の電波生命体の脅威を知らない。もし、現代の地球に蘇ったとしたら、地球は完全に、究極の電波生命体に支配されてしまう」

そこでオリヒメは一呼吸を置く。

「だからスバル君！ あなたに協力して欲しいの」

「協力？」

「彼らよりも早く、残り2つのオーパーツを発見し、復活を阻止する事。そのためにはロツクマン、あなたの力が必要なのだ」

「はあ……」

スバルは曖昧な返事を返す。

急に、協力して欲しいと言われてもピンと来ない。寧ろ、スバル達はそのオーパーツの一つを持っているのだから狙われる側だ。つまり、自分の身を守らなければいけない。

しかも、敵は超科学が栄えたい大陸に封印されていた電波体だ。そんな強大な敵から身を守りつつ、残りのオーパーツを流石すことなど出来るだろうか。

スバルは暫く悩み出す。

だが、その瞬間、この部屋全体に警報が鳴り響いた。

『「ッッ!!?!」』

刹那、教室の後ろの壁が一瞬にして破壊された。

爆風と瓦礫がスバル達に降り注ぐ。

だが、それをウォーロツクは現実世界に周波数を合わせてスバルを庇った。

しかし、オリヒメまでは守りきれなかった。オリヒメに瓦礫が降り注ぐ事はなかったが、代わりに爆風に飛ばされ、体が宙に浮いた。

「きゃあああああつ!!」

その刹那、ガシツと言う受け止める音が聞こえた。見ると、宙に飛ばされたはずのオリヒメは先程案内されてきた灰色の民族衣装を着た男性に受け止められていた。

ここに飛んで来る事が分かっていたかのように正確な場所に立つ

ていた。

「オリヒメさん！」

見る限り大丈夫なようだ。

問題は後ろだ。敵がいることは大体想像が付いた。問題は戦力と人数だ。

兎に角、相手の正体が分からない事には始まらない。

スバルはウォーロックと同時に後ろの破壊された壁の方に視線を向ける。

壁からは眩い光が漏れて、暗い部屋を照らしていた。

その光が漏れている、穴が開いた壁に誰かがいた。

全体的に黒い姿。髪は真っ白。白髪ではあるが、そう歳を取っているのではなく、スバルと同じぐらいの少年のようだ。目を保護する紫色のバイザーが付いている。更に紫色の電波を腕に纏っているようにも見える。

その少年はスバル達を見下すように、しかし憎しみがあるような目つきで睨んでいた。

『…………スゲエ殺気だ…………』

ウォーロックも警戒している。殺気の重圧からして相当な実力の持ち主である事は間違いないようだ。

「誰なんだ…………」

「スバル君！ そいつの目的はベルセルクの剣よ！」

先程飛ばされたオリヒメの声が聞こえた。

狙いはベルセルクの剣。

ギリツと奥歯を噛み締めた。刹那、少年は右手に紫色の電波を一瞬にして溜めた。

そして紫色の電波を纏わせた右手を飛ばした。右手はスバルの直ぐ目の前まで迫っている。

ドカーンッ！

爆音が聞こえ、直ぐに爆煙が生じる。

スバル達は煙のせいで姿が見えなくなってしまふ。

「……フン」

瞬間、少年は周波数を変えて姿を消した。

更に瞬間、スバルが電波変換したロツクマンの姿が先程少年が立っていた場所の2メートルほど後ろの場所に現れる。

ロツクマンは後を取ったと思っていた。だが、それは、まだ少年が周波数を変えていなければの話だ。

先程の少年はロツクマンの更に2、3メートル後ろに周波数を変えて現れた。

そして左掌に右手の周波数を変えて入れる。そしてそこから右手を引き抜くと、石の様な剣を取り出し構える。

瞬間、ロツクマンの元までロケットのような速さで突っ込み、一気に間合いを詰める。

「バトルカード！ バリア！」

ガキーンッ！

剣を振り下ろされる寸前でバリアを展開する。

剣の衝撃をバリアが吸収していく……はずなのだが、吸収してい

かない。バリアは直ぐに耐え切れなくなる。

刹那、剣の刃がバリアを綺麗に真っ二つに切り裂いた。

バリントツ、ガキンツッ！

危機一髪の所でロックマンは左手をソードに変えて攻撃を受け止めた。が。

「フンツッ！」

しかし、少年は一度剣を数センチ引かせる。それにより、ロックマンの体がソードに力を入れていた方に傾く。

刹那、傾いた体を戻そうとした所を狙い、一気に剣をなぎ払う。

すると、ロックマンの体がもの凄い勢いで吹き飛ばされ、数メートル飛ばされて壁に激突する。

この動きは間違いなく、幾度となく修羅場を乗り越えてきた戦士の動きだ。

第3話 ムーの封印 後編（後書き）

何か最後グダグダな意味の分からない描写ですみませんorz

とりあえず、今度の土日月は更新どころか執筆すらできません。え？何でかって？ そりゃ、ポケモンやりこむからに決まってるまs)

殴

第4話 プライの襲撃 前編（前書き）

ま、まだ2ヶ月経っていない……！

第4話 ブライの襲撃 前編

デンサン大学西校舎の廊下の壁が突き破られた。

剣を持った黒い少年に吹き飛ばされたロックマンが壁に激突し、そのまま突き破って外に放り出されたのだ。

ロックマンは背中から地面に着くことはなく、足で着地し踏みとどまる。

しかし、さっきの一撃で相当なダメージを負ってしまった。今にも倒れそうな体を、地面に右手を着いて支える。

「ハア、ハア……一体何なんだこいつは……」

『気をつける、スバル。奴は途轍もなく強いぞ』

数メートル先に、右手に剣を持った黒い少年は立っていた。少年はロックマンと比べると、息切れ所か汗すら掻かない。それに加えてロックマンに見下したような視線を向けている。

ロックマンは何とか倒れそうな体を起こし、剣には剣をと左手をロングソードへと変形させる。

少年はロックマンに剣先を向ける。

『来るぞッ！』

瞬間、ロックマンの間合いへと一瞬にして飛び込み、剣を振り下ろす。

ガキンツと鉄を鉄で叩いた様な音が響く。ロングソードで受け止めたのだ。

しかし、力は相手のほうが上だ。ロックマンは両手で剣を抑えているのに対し、少年は片手で剣を振り下ろしている。まだ本気では

ない。

力を込めて少年の剣を振り払う。が、刹那。振り払われた勢いを利用して、弧を描くように剣を回して、勢いを殺さずにそのままロックマンの腹に直撃させる。

くの字に体が曲がり、ロックマンの体は後ろに吹き飛ぶ。数十メートル先には校舎があり、その壁に背中からぶつかった。

「ッッー……ッ！」

痛みを感じている暇はなかった。既に目の前に少年が居て、剣を振り下ろそうと構えていたのだから。

ドゴンッー！

鈍い音と共に土煙が上がった。そのせいでロックマンの姿が分からなくなる。

直ぐに土煙は晴れた。

剣が振り下ろされた直ぐ右に、身をかがめ、マッドバルカンを構えたロックマンの姿があった。

刹那、少年に向けて至近距離からバルカンを放つ。

だが少年は、タツと音を立ててジャンプし、2、3メートル程の高さを大きくバク転する。ただそれだけの動作で、無数のバルカンの弾は一発も当たらなかった。

「かわされた!? そんな……」

少年は着地すると同時に、剣を構えてロックマンのもとに一瞬で踏み込みマッドバルカンの銃口を切り裂いた。

同時にマッドバルカンは、元のウォーロックの姿に戻された。

「くっ……!!」

オリヒメはまだ先ほどの部屋に残っていた。パネルを操作し、モニターに映像を映し出す。映像の中から何かを探しているようだ。ブオンと映し出されていく主な映像はピラミッドやモアイ像、石碑などが多い。

だが、映し出す速さが速過ぎる。人間の目で見て、脳が認識するかしないかの僅か0.1秒にも満たない時間のうちに凄い数の映像が映し出されては切り替わっていく。一度でも瞬きをしてしまうと、その僅かなタイムラグで認識が追いつかなくなりそうぐらいだ。すると、小さく張り出された映像の一つを拡大した。そこにはある記号^{せじ}が記されていた。

あの少年の胸に刻まれている記号と同じものだ。

一旦後ろの身を引いたロックマンのもとへ、少年がゆっくりと剣を構えて近づいてくる。まるで、死のカウントダウンのようにゆっ

くりと。

『……おい、あいつ変だぞ』

「変？ どういうこと？」

『わからねえ。けど……あいつ、何かが違う』

何だよそれとロックマンは聞き返す。だが、それはウォーロックにも答えられない。「何かが違う」「ことは分かるが、「何が違うか」という具体的なことまで分かっていないからだ。

『（何だ……この気味悪い違和感は……）』

そうこう考えている時間にも、少年はゆっくりと近づいてきている。

しかし、何かを仕掛けてくる様子はない。

やられる前にやる。この言葉通り、ロックマンは少年より先に攻撃を仕掛ける。

「バトルカード！ ジェットアタック！」

右手をクロッカーに変え、黄緑色の光に包まれると同時に、少年のもとに高速の早さで突っ込んだ。

「フンッ」

少年は直撃する寸前に、右肩を斜め後ろに引いた。すると、ロックマンの突進は呆気なくあの少年にかわされ、そのまま数メートルほど進んだところで停止する。

だが、ロックマンも避けられることは計算の内に入れていた。停止すると共に向きを少年へと修正、そしてもう一度突進。そこまでの動作まで僅か一瞬。この瞬時の切り替えに、普通は付いていけない筈だ。

そう、普通ならば。

「……ッ」

先ほどと同じで肩を移動させ、かわす体制に入る。

そしてロックマンが少年の居た場所を通過する瞬間に、右手に持っている剣をロックマンの足元にそえる。

「ッ!」

ギリギリの所でジェットアタックを解除した。あのまま進めば、大層派手にこけていたであろう。

しかし解除すると同時に、高速の速さを急に停止させたため慣性の力がはたらき、体が止まることについて行けず前かがみの体制になってしまう。

つまりロックマンは今、あの少年に背中を向けている。

「くそオ……ッ!？」

刹那、違和感を感じた。自分の胸の辺りだ。見ると、自分の体を少年の右腕が突き抜けている。

その腕は上に動き、手がロックマンの顔をガシッと鷲掴みした。瞬間、鷲掴みしたまま軽々と後ろに投げ飛ばした。

「ぐはッ!」

数メートル先の地面に背中から着地してしまい、肺の空気が全て吐き出される。

一体何が起きたのか分からなかった。少年の腕が自分の胸を突き抜けた？ それにしては自分の体に異変はない。ましてや穴など開いていない。

「なんて野郎だ……あいつ、腕から肩だけ周波数を変換させやがった」

つまりあの少年は「体全体の周波数」しか変換できないのではなく、それに加えて「体の一部だけ」を変換することもできるのだ。

普通の電波人間、電波体はそこまで器用なこととはできない筈だ。そんな事をして、もし失敗すれば体の部分^{パーツ}と部分^{パーツ}の周波数が合わなくなり、内部から体が破壊されてしまう。

しかしあの少年は違った。あの少年は失敗することなく、難なく各部分の周波数を変えることが出来ているのだから。

ポオツ！

刹那、少年は右拳に紫色の電波が纏った。

「エンプティー！ ジャミング砲を！」

調べ物を終えたオリヒメが灰色の民族衣装を着た男性、エンプテ
イーに指示を出す。

エンプテイーはオリヒメが使っているパネルとは違う場所にある
パネルを操作する。

それと同時に、大学の西校舎。つまりオリヒメがいる校舎の屋根
がガガガツと開き、そこから巨大なアンテナが姿を現した。

他にも、少年とロックマンの周りを取り囲む校舎。中央校舎、北
校舎の屋根が開き、西校舎と同じ巨大なアンテナが出現する。

アンテナは全て、少年に照準を合わせている。

ヒュウウウン……

アンテナからエネルギーを溜める音が聞こえた。刹那、

ビイイイイイイッ！！

三つのアンテナから極太意レーザーが放たれ、全て少年に直撃す
る。

「ぐわアああああッ、うぐッ、アああああッ！！！」

悲鳴とも呼べる、悶え苦しんでいる叫び声がその場を包む。

その際にロックマンは立ち上がり、最後のバトルカードをプレデ
ーションさせる。

「バトルカード！ヘビーキャノン！」

文字通り、重たい威力の砲弾。

ドカンツと一撃放つと、少年のどてっ腹に直撃。少年の体はその
威力に負け、後ろに吹き飛び西校舎の壁に激突する。

「がアッ!！」

今の直撃がものすごいダメージを負ったのだろうか。少年は直ぐに気絶してしまったようだ。

ロックマンはそれを確認すると、手を膝に着いて電波変換を解除した。

「あらあら、随分派手にやられたみたいね」

「ゴツ!?!」

上空から声が響いてきた。
すると、一人の少女が舞い降りてきた。

天使。

瞬間、そう思った。

黄色い容姿に白い翼。髪は両サイドに分けており、白いバイザーがついている。

だが、天使のイメージとは逆に、死神の様な大鎌を右手に持っている。鎌の色は白。刃と柄の接触部分は七色に光る宝石のような物がついている。

『……………テメエ、何者だ?』

スターキャリアーからウォーロックが質問した。
ウォーロックにしては言葉に力がこもっていなかった。それ程、
警戒しているのだ。

しかし、彼女は間髪を容れずに答えた。

「気にしないで？ あなた達には用はないわ。その気絶している彼
を連れて行くだけだから」

天使はそう答えると、少年のもとに近づいてく。
本当に何もする気はないように。

「……君達は一体……」

自然とスバルの口からそんな言葉が出た。

目の前の天使は、少年を担ぐとクスツと笑ってこう言った。

「あなた達の持っているオーパーツを狙う者。とでも言うておくわ」

「ッ！」

天使の言葉に驚愕する二人。

瞬間、天使は少年と共に、退散するように姿を消した。

第4話 プライの襲撃 前編（後書き）

またまたお久しぶりです、そして遅れてすみませんm(_____)m

ポケモンの他にGEをやったんで……あとテストがあつてですね。良い点数取らないと高校の調査書がえらい事に……まあ取れませんでしたけどwww(笑) 笑い事じゃない

それで、また2週間後に後期テスト……中学最後のテスト。これの点数取るために勉強真面目にやるんで、執筆はまたまた出来なさそうです。すみません。

じゃ、今回の話。二人目のオリキャラです。

あ、補足ですけど、少年の少女は電波変換時の姿(まあ少年はわかりますよねw)、少女の「天使」とはあくまで見た目がそう見えるだけで、実際そうではありませんのでw

まあ簡単ですけど補足終わりです。では

第5話 プライの襲撃 後編(前書き)

今年ラストに更新ですw

第5話 ブライの襲撃 後編

スバルは呆然とそこに立ち尽くしていた。今まで眼前にいた天使と少年の場所には、既に誰もいない。しかし、スバルは動こうとも、スターキャリアーの中にいるウォーロックに声をかけようともしなかった。

「
」

沈黙。

しかし、その沈黙も長くは続かなかった。

「スバル君！」

声の主はオリヒメ。

デンサン大学の西校舎からこちらに向かってきているところだ。

オリヒメはスバルの近くに駆け寄ると、息を切らすことなく口を開く。

「スバル君、大丈夫？」

「大丈夫です、助かりました。……さっきのあれは？」

スバルは、先ほどの少年に極太いレーザーを浴びせたアンテナに顔を向けた。

オリヒメはそれに間髪を入れずに答える。

「ジャミング砲よ」

付け加えて続ける。

「ジャミング砲の発生させる特殊な波長の電波は、電波変換している人間や電波体に干渉して強烈なダメージを与えるの。ムーの超科学を悪用しようとしている奴等に対抗するために私が開発したものでよ」

悪用とは、さっきの少年達のことだろうか。確か、『オーパーツを狙う者』とは言っていた。

「……あの2人は何者なんですか？」

「……少年の姿の名前は『ブライ』。でも……もう一人の方は分からないわ」

「え？」

何故、とスバルは続ける。

「もう一人の方だけ、何も記されてなかったの」

意味がわからない、と言いたげな顔のスバルに、順序よくオリヒメは話す。

「少年の胸に記号のようなものがあつたのは覚えてる？」

そういえばあつたような気がする、とスバルは思う。殆ど気にして見ている暇がなかったので、あくまで“気がする”だ。

「あの記号をヒントにいろいろな石碑のデータと照らし合わせてみ

た結果、ムーの紋章であることが分かったの」

「ムーの!?!」

つまり、それは「滅びたはずのムーの生き残り」という意味を表す……。

オリヒメの話にはまだ続きがある。

「それから、ムーの遺跡のありつただけのデータを調べ直したの。すると、黒い姿電波人間、つまりあの少年のことが記されたいわ。あの姿の名は『ブライ』」

ブライ。

それが彼の姿の名前だった。

しかし、彼はムーの遺跡を調べることで、その正体が分かった。ならば、あの『天使』の方も同じようにムーの遺跡に、なんらかの情報が記されているのではないだろうか？

しかし、その疑問に対する正しい答えはなかった。

「でも、それ以上のことは記されていない……」

「え?」

「あの、『ブライ』を助けに来た電波体のことは何も記されていないかったのよ……」

何も記されていないかった。

あの天使のことは何も分からない。

だが、分かったことはいくつもある。あの黒い少年が『ブライ』であること。そして、その彼には『仲間』のような者がいたこと。

そして、『オーパーツを狙っている』こと。

「ブライ……」

スバルはそつとその名を呟くと、奥歯を噛み締めた。

スバル宅 スバルの部屋

その日の夕方、スバルは自分の家へと帰ってきていた。

家へは電波変換ではなく、オリヒメの車で送ってもらったのだ。もつとも、運転していたのはエンプティだったが。

「……………」

机に座って考えこんでいるスバル。

あの大学へ行った理由は、オリヒメにオーパーツ探しを頼まれたからだ。それを引き受けるかどうかはまだ言っていない。今日は色

々なことがあったので、それを整理した上で後日返事をすると言った具合なのだ。

「どう思う、ウォーロック？」

自分だけで判断するのもあれなので、ウォーロックに相談する。でも、ウォーロックも腕を組んで考えこんでいた。なんだかんだで、この2人は似たもの同士なのかもしれない。

「……いきなり古代文明って言われてもなア……そもそも、俺は地球人じゃねえし……」

言われてみればその通りだ。宇宙人に相談しても、地球のことなんだから分かる範囲も狭い。

ならば、同じ地球人に相談してみてもはどうだろうか。スバルはスターキヤリアーを手に取り、ある人に電話を繋げる。ピツという音と共に、見知った少女顔が映し出された。

《あ、スバル君！》

相手はミソラだ。なんだか、いつもと着ている服が違うように見えるのだが。

「今いいかな？」

《ああ、ごめんね、今からカメラリハなの！》

カメラリハ？

スバルはあまり聞きなれない単語に小首を傾げたが、どうやら「カメラリハ＝サル」の略らしい。

《ちょっと、ディレクター！ やっぱりこの格好でバンジージャンプは、事務所的にNGだと思っただけ！》

ピツと通話が切れる。

一瞬、なんの撮影だ、と思ったが、そこはあえてスルーしておく。

「……………ミソラちゃんは無理そうだね」

『だな』

というわけで、スバルはまた電話を繋げようとする。しかし、今度はミソラではない。

しかし、

「あれ、繋がらない？」

何度コール音が鳴っても出ないのだ。ミソラと同じで、カメラハ中で出られないのかな？と思いい、仕方なくスバルは通話を切った。

『大変だな。アイドルって奴も』

「うん……………やっぱり明日、天地さんに相談してみようか」

その頃

何処だかわからない場所。しかし、空は暗かった。もう夜なのだ。そこに、一人の黒い姿の少年と、一人の天使にも似た（しかし天使にも似つかない）黄緑色の姿をした電波人間が立っていた。

黒い少年の姿はブライ。

ブライは天使の方を睨みつけると、光に包まれた。瞬間、白髪で褐色の少年が現れた。耳には、金色のかなり大きめなイヤリングをしている。黒い服の胸部のあたりには、ブライ時同様、ムーの紋章が記されていた。

「……まったく、余計なことを」

「あら、せつかく助けてあげたのに……何、その態度？」

黄緑色の電波人間も光に包まれる。瞬間、少年同様白髪でストリートに髪を下ろした褐色の少女が現れる。割と穏やかそうな顔の少女の着ている白い服の胸には、これまた少年同様にムーの紋章が記されていた。

「フンッ」

「でも、あのままだとあなたどうなっていたかしら？」

「……次余計なことしたら、分かってるんだろうな？」

「そう言われても」

「あいつは……俺が仕留める」

少年は少女言葉を遮りながら呟いた。

「そうね……分かったわ」

少女はしぶしぶ諦めることにした。だが、しかし、と付け加える。

「もしも時は余計なこと、させてもらっわ。ソロ。」

「……………」

返事は返さなかったが、少女はそれを返事として受け取る。

2人は会話が終わったと同時にその場を去っていった。

翌日　アマケン

学校の帰りに、スバルはアマケンに寄っていた。理由は勿論、昨日の事と同時にオリヒメの事を伝えるためだ。

「ドクター・オリヒメだつて!？」

スバルが名前を告げた途端、天地が声を張り上げた。

「天地さん知ってるの？」

「知ってるも何も、彼女は世界的に有名な科学者だよ！」

「電波研究の第一人者で、メディオコンポーザーは彼女の発明なんです」

横から宇田海が付け加えてくる。

メディオコンポーザーとは電波の周波数などを調整することができる機械のことである。

かつて、FM星人がメディオコンポーザーを利用して作り出した電波変換装置。それは、電波を色々な周波数に変換させ、電波体だけで電波変換したり、電波体が物質変換で人間に変換したりしていた。

宇田海はそして、と間をあけて更に付け加える。

「電波の物質化するための仮説を立てたのも、ドクター・オリヒメ

なのです！」

「えっ……じゃあ、宇田海さんが行っている『マテリアライズ』をオリヒメさんは完成させたの？」

「はい。ですが、彼女はあくまでその『物質化』まで辿りついたんですが、そのために必要なエリア。つまり、『宇田海エリア（仮）』のような特殊な空間を作り出しはしないのです。僕はそれを、今やっている研究で完成させようと思っているのです！」

「へえ……そんなに凄い人だったんだ……」

スバルは最後の言葉を適当に受け流しながら言う。

「それにしても、ムー大陸にオーパーツ……FM王の出現が地球にそんな影響を与えていたなんて……」

『おおい！！』

スターキャリアーからやたら低音の声が聞こえた。と思ったらウオーロツクだ。

『なんとかしてくれねえか。体ん中にオーパーツなんてモンが入っているとと思うと、気持ち悪くてしょうがねえ。どうにかして、取り出せねえか？』

スターキャリアーを覗きながら、天地が続ける。

「そうだな。ちょっと調べてみよう。このままじゃオーパーツを狙う連中にまた狙われるだろうし。電波変換してるスバル君にも、悪

影響を及ぼすかもしれない」

『ああ、頼むぜ!』

というわけで、天地はスバルに一つ提案する。

「明日までウォーロック預からせてくれないかな?」

勿論、スバルはコクツと頷きOKを出す。

「じゃあ、ウォーロック、こっちに移ってくれ」

スバルと天地は一つの丸いシエルターのような装置の前に移動する。そこにスターキャリアを置く。すると、中にいたウォーロックは自動的にシエルターの中に移動されていった。なんだか、拘束されているようにも見えるのだが、気のせいだろうか……。

「大丈夫?」

『ああ』

「あ、もうこんな時間だ」

スバルがスターキャリアの時計に目を移すと、すでに5時を過ぎていた。子供はもう帰る時間というやつだ。

「それじゃあ僕帰るね。天地さん。また明日来ます」

「ああ。気をつけて帰るんだよ」

スバルはその言葉に頷いた。

「それじゃあウォーロック。また明日」

さっさとスバルは自動ドアをくぐり抜けて、アマケンを後にした。

『……少しは心配してくれてもよくね？』

ウォーロック言葉はむなしく、誰の耳にも入らなかった。

第5話 プライの襲撃 後編（後書き）

後半、少し急ぎ足で書いたので半ばてきとうなところがあります。

すみませんm(____)m

だが、しかし、紅白で奈々さんみたいわけなのでしょうがないんです）え

では、皆さん良いお年を

番外編 帰ってきた雑談・一周年記念・

どうも少し遅れて、あけましておめでとございます。某小説の作者、シューティングスターです。

「何故『某』ってつけたんですか!? この小説の事なのに隠して何の意味が!?!」

おお、新年早々良いツツコミするね。流石スバル君

「いや、ツツコンで置かないと色々駄目でしょ……」

と、言うわけで【『小説家になろう』デビュー一周年記念・帰ってきた雑談・】スタートです!

「で、ここ何処ですか?」

ん、何って見れば分かるじゃん、スバル君。

「……前作の『スターフォース』の時に使っていたスタジオではないのはわかりますけど……見た限り、四角い空間の中みたいですね」

そう。前までと違って、『何もない部屋』だよ。

「で、一周年記念ですけど、何をやる気ですか?」

……その前に私達だけってのもあれだし、誰か呼ぼうか。

10分後

よし、皆そろった？ それじゃあ、名前呼ぶからお返事オーケー？

「……おい、スバル。あいつ何かキャラ変わってねえか？」

「え、そう？ どの変が変わったと思うの、不死宮？」

「……いや、何となくだから良いんだけどよ。それにしてもお前、いい加減呼び捨てやめ」

スバル君。

「はい！ え？ 不死宮何か言った？」

「……何でもねえよ（チクショー！！）」

不死宮。

「お、おう」

ライセンスさん。

「うるせー」

ミソラちゃん。

「はいー！」

亜夢ぴよん。

「……作者。今なんて言った……？」

失礼、噛みました。

「嘘付け、わざとでしょ！ 今絶対『ぴよん』って言ったでしょ！
！ 何よ、『ちゃん』を『ぴよん』って噛むってありえないでしょ
！……」

噛みま“み”た。

「わざとじゃない!？」

はい、「冗談はこのぐらいにして、全員揃ったね。

「はぐらかした!？」

(まあ、ウサギ年だから『ちゃん』を『ぴよん』って言うてみたんだけど……あんまりウケは良くなかったみたいだ)

「こんのお、作者ア……!……!」

「まあまあ、落ち着いて亜夢」

「くっ、覚えてろよ作者……!……!」

わぁお、読心術ってコワイ

「（……やっぱ変わってる……キャラ エンジでもしたのか……？）
」

「で、俺達をここへ呼んだ理由は何だ？ ってか、ここ何処だ？」

ライセンスさん見ての通り、四角い空間の『何も無い部屋』だよ。
さあて、いつものメンバーも揃ったことだし本題に入ろう。

「あれ？ ハープ達は？ ここに来る時までにはいた筈なのに……」

ああ、ここは電波体は入ることは出来ないんだよ。ちよいと細工が
してあるからね だから、部屋の外で待ってもらってるよ。

「で、作者。本題は？」

うん、まああれですよ。一周年記念に何かやるうと思ってるんです
よ。

「この何も無い部屋でか？」

そう、『何も無い部屋』で。ここで、皆の発想力を試そうと思いま
す。

「「「「「はあ？」「」「」「」

問題です。この『何も無い部屋』には、文字通り『何も無い』。無
駄に広いこの部屋で、あなたならどうする？ あ、これを読んでい

る読者さんにも考えてほしいです

「『何も無い』ってことは、『物を使う』なんて事は出来ないのよね？」

お、さえてるねえ、亜夢ちゃん。さ、制限時間は1分。

「「「「「みじかッ！」「」「」「」

よーい、スタート！

1分後

時間だ。答えを聞こう。

「「「「「（何処のムカ……）」」「」「」

スバル君から順番に答えをどうぞ。

「え、僕から！？ えーっと……物が無い、使えないって事は体を使う？」

うむ、50パーセント正解。次、不死宮。

「俺なりに考えた結果、何も無いって言っても、それはこの部屋だけだ。でも、今俺達が所持してる物は使えるんじゃないか？」

うむ、そうとも言える。スバル君と合わせて75パーセント正解。ライセンズさんとミソラちゃんはどう？

「俺は何か見るのではないか、と考えた」

「あたしはあんまりそういうのはわからないけど、歌を歌えばいいんじゃないかな？」

合わせて90パーセント正解　さあ、最後に亜夢ちゃん。

「……まさか、またあたし達に歌わせるとかじゃないわよね？」

はい正解

「……え、マジで／＼ほんとに……？」

「……え、マジで／＼ほんとに……？」

「……はあ？　え、あつてるでしょ！？」 『体を使う』、 『動かす』で歌。物はミソラの持つてるギターやマイク。『見る』はあんた達ギャラリーのこと。これであつてるはずよ！」

うむ、完璧であっている。いい／＼や、正確にはあつていたかにや／＼。

「（え、何でそこでにや／＼？）……どういふことよ？」

うむ、良くぞ聞いてくれた！　まあ、そのままの文の通りあつて『いた』。過去形だね

「つまり、さっきまで考えていたけど、今は別のことを考えているっ

てこと？」

その通り 流石スバル君

「……なんじゃそりゃああああああああああああああああああああああああああああああああ！ え、何？ 今まで考えてた1分間は無駄だったってこと！？」

だから、1分なんだよ亜夢ちゃん。短い時間でわかるし、あんまり時間の無駄にならない

「何言ってるのよ！ タイム・イズ・マネー！ 1分でも大切な時間よ！！」

「お、落ち着いてよ亜夢ちゃん」

「スバル君は黙ってて！！ この作者のせいで、新年早々大切な時間がもてあそばれたのよ！！ 大体、ここで何をするか決まっていないじゃない！ ってか、何で何もないのよ！！！」

ん？ 何で何もないのか知りたい？

「「「「「うん「「「「」

「……………」

ここが新しいスタジオだから。

「「「「「……はあ？」「「「「」

一周年記念だから新しいスタジオに変えることにしたんだよ。それで、まだ変えたというか引越した？ばかりだから何にもないってことだよん　オーケー？

「え、じゃあスタジオでやろうとしてたさっきのあれは？」

引越して最初にやるのがライブでもいいかなと。

「……おいおい、なんだこのグダグダで超おもしろくない話しは。ここまで山もオチもない話しで大丈夫なのかよ？」

不死宮、大丈夫だ、問題ない。

「いやいや、大ありだからね！？　それよりか、ハープ達が入って来れなかったのは！？」

嘘びよん　電波体の人（？）達はここに持つてくる荷物、つまり前のスタジオにあった機材なんかを持ってきてもらってるんだよ

「こき使ってる！？」

イエス！なのだよライセンスさん。まあ、そんなわけでそろそろお開き

「できるかあああああああああああああああああ！！！」

何か問題でも？

「大ありよ！　一周年記念でこれはないわよ！！　グダグダにも程があるでしょうよ！！！」

ん、皆何か勘違いしてない？

「……………え？」「……………」

グダグダこそ私のクオリティー！

「……………おい！」「……………」

実を言うとだね、新年早々頭がボーっとしててね。おもしろい事浮かばないんだよ。ってなわけでお開き

「勝手に終わらすな」

チツ、まだだめなのかよ。亜夢ちゃんのケーチー。

「おーい、何か黒いのが出てるぞー」

気のせいだ、不死宮。あ、そうそう この頃執筆意欲が沸いてるんだよね！ 禁 を全巻読んでしまったわ、リト スはクリアしたわで凄い書きたいネタがいっぱいあるんだよね！ 今の私はやばいよ？ 何か爆発しそうだよ？

「何が爆発するんだよ……………」

例えだよライセンスさん。

「でも作者さん受験はいいの？」

グサリッ！！

……何かやる気がなくなってきたよミソラちゃん……くそ、何だよ。うなぎパイでも食べたい気分だ。

「意味わかんないし、リト スからわざわざ持って来なくていいから……」

最近、西尾維新さんの作品にはまってるんだよね。って言うてもまだ化 語と刀 しか見てないんだけどねw

「いや、どうでもいいし、はぐらかしてるし……」

というわけでお開き

「いやいや、こんなんじゃ終われないし」

……何かさあ、スバル君。この頃『いやいや』が多くない？

「そっ?」

というわけでお開き。

「話しにまぎれて終わらそうとしてる!?! いやいやいや、駄目だからね!?!」

くっ、失敗……ってか、なんだこのグダグダ!?!

「……………今更!?!」「……………」

ここまでグダグダにはならない予定だったのに……これじゃあ一周

年記念なのに示しがつかないぞ……。最後ぐらいビシッと決めないと。

「んじゃあ、新年だし、抱負でもどうだ？」

おお、ライセンスさんGJ！　そうか、抱負か……。スバル君の抱負は何？

「僕はそのまま皆仲良く居られますように、かな」

おもしろくない。

「え、いや、え……。？」

不死宮はどんなの？

「……出番が増えるように」

無理。

「　　何イ!!!?」

ミソラちゃんは？

「もっと歌が上手くなりますように」

ミソラちゃんラシイネ。

「片言!?!」

ライセンスさんは？

「 出番 ☺ 」

以下省略。

「 ちょ、最後まで言わせるよ！？ 俺泣いちまうぞ！？ 」

はいはい、泣かない泣かない。 亜夢ちゃんはどう？

「 ……別に無いわよ。強いて言うなら作者死ぬ？ 」

それってもう抱負じゃなくて願望だよね！？ おかしいよね！？

「 そろそろ作者は何よ？ 」

え、私は……受験合格。

「 「 「 「 「 ぶつ つう …… 「 「 「 「 「 」

うるちゃい、うるちゃい、うるちゃーい。もういい、今度こそお開きにするからね！

「 最後までグダグダだね 」

「ほんとだね……」

「 新年早々駄目駄目だな 」

「 こんなんでこの小説続くのかよ 」

「ほんと、駄目作者ね……」

あ、一つ言っただけだ。あ、一つ言っただけだ。あ、一つ言っただけだ。

「……?」「」「」

この新しいスタジオ。ここで起きた出来事を、人の記憶から消すことが出来るんだよね。

「……はあ?」「」「」

そんなわけでポチッと

「……ッ!」「」「」

これでオーケー。それでは皆さん。今年もよろしくお願ひします。
フフフ

第6話 初日（九月一日） 前編（前書き）

……なんかもう、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

第6話 初日（九月一日） 前編

九月一日。

学生の多くが（めんどくさい）学校の2学期が開始されると認識している日である。

彼女もまたその一人。

「だアあああああ！ 今日からまた学校かよオー……チョー、つまんねエ。しかもねみ〜」

肩の高さ程度の黒髪の少女。少女の名前は聖堂せいどう 月奈つきな。何処どこにもいるコダマ高校の高校一年生。

セーラー服ではなく、高校指定の夏服を着ている彼女は今日も元気だ。

「元気イ？ はんッ、何をおっしゃいますやら。こちらら、昨日の夏休み最終日まで、寝る間も惜しんでアニメを視聴しまくって殆ど寝てねエーんだよ。ツたく、夏休み初日に『夏休みだぜイヤツフウウウウ！』とか言っつて変なテンションにならなきゃよかったZE……おかげで約四〇日間ずっとヒートし続け、燃え尽きたときには明日学校つて……ありえねエー、ついでにヘタ アにはまりチュー」

「……誰に説明しているの？」

「ん？ おー、これはこれはセイトカイチョー。お久しぶりだNE」

「だから、その呼び方で呼ばないでって何度も言ってるじゃない。私には瓶子へいじ 瑞清みずきよつて名前があるんだから。大体、生徒会長つて中

学の時の話しじゃないの」

「いやー、去年までの名残でついNE。ツツか、瑞清って呼び難い」

話しかけられた人物に対し、打って変わって月奈のテンションが変わった。

横から入ってきた（月奈とは真逆のタイプの）少女は、月奈のコダマ中学時代の生徒会長。そして月奈の親友だったりもする。

茶髪のロングヘアが腰の高さまである彼女は、高校指定の夏服がよく似合っていて、周囲から見たらモデルでもやっているのではと疑うほどである。

「はあ……月奈。夏休みにはちゃんと勉強はした？」

「時間が惜しいからそんなモンしてましエーん！ ビシッ」

月奈はお茶目（周りから見ると引いてしまう様なくらい眩しい笑顔）に敬礼。

「ちゃんと毎日三回の食事は取った？」

「毎日徹夜でアニメみたり漫画読んだりゲームしたりしてたからお昼に起きる事が多くて、朝ごはんを取ったり取らなかったり！ イエーイ」

月奈はお茶目にブイサイン。

「家に閉じこもってないで、ちゃんと外出した？」

「夏 ミに三日間行ったZ E イヤッブー!!」

月奈はお茶目に飛び上がる。

この意味の分からなかった行動と質問に対する回答に、瓶子は呆れてため息が漏れる。夏休みの生活もそうだが、この異様なテンションのせいで余計にため息が出てしまう。

中学で出会った時から月奈はいつもこんな調子だった。

瓶子としては、月奈にはもっともともな人間になってほしいと願っているのだが、それも叶わぬ願いかもしれない。

「月奈？ もう少しまともな夏休み生活はおくれなかったの？」

「おーおー、流石成績優秀、共にスポーツ万能、さらにコダマ高校で男女問わずの憧れの的モテモテさんはお堅いですNEE。」

「その誰かに説明するような口調と意味の分からない言葉を使うのはやめてくれないかしら……?」

ムツとする瓶子。

それに比べて月奈は鼻歌を歌いだしながら、学校の方へ歩みを進めていった。

あの鼻歌について瓶子は少し記憶をさぐる。確か『ボカロ(?)』とかいう歌の種類(?)だと月奈が言っていたことを思い出す。まあ、瓶子としてわどうでもいいことだ。

月奈はあんな感じ(彼女曰く、腐女子一歩手前らしい)なのだが、瓶子はその類にそれほど詳しくない。『成績優秀』といっても、興ひ味つよががない知識にはとても疎いのだ。まあ、それが人間なのだが。

「……あ、いけない。遅刻しちゃうわ」

ふと思い出してスターキャリアの電波時計を見ると、既に登校時刻一〇分前になっていた。

瓶子は考えるのはこれくらいにして、とりあえず遅刻しないように、コダマ高校へ歩みを進める。

時は進んでコダマ高校

お昼休み、一一時四〇分。

月奈は自分の席に座り、机に顔をつき伏して寝むっている。その隣の席には瓶子がいて、丁度月奈の体を揺すって起こそうとしているところだった。

10分前まで高校の体育館で2学期の始業式が行われていた。周りから見ると、「始業式それに疲れてしま たのだろう。なんせ、校長ながいのありがたいお話があるんだ。当然だろう」と誰もが思うだろう。

「月奈、起きなさい」

「ぐー……」

しかし、

「もうっ！ 始業式の時も殆ど寝ていたんだからそろそろ起きなさい……」

「むにゃむにゃ……ぐー……」

ドンガラガツシャァン！

周囲から物凄い音が教室中に響いた。

寝ている月奈と、それを起こそうとしている瓶子の様子を見ていたの周りの男子（その殆どが瓶子に見惚れて たわけだが）が、瓶子の言葉に一気にズッコケたのだ。

そんなわけで訂正しよう。「始業式それに疲れたから寝ている」のではなく「ただ単に眠いから寝ている」のだ。

始業式が初まってから今の時間まで約三時間が経過している。その殆どを睡眠に費やしたというのに彼女は起きる様子がない。一体昨日は何時まで起きていたんだ。そして、朝はいつものように異様なテンションで元気だったじゃないかとツツコミが沸いてくる。

午前一一時四五分。

そろそろお腹が空いてきた瓶子としては、さっさと月奈を起こし売店に行きたいところだ。だが、月奈は全く起きる様子がない。この居眠り姫はもう永遠に起きないんじゃないかと思えてくる程ぐっすりと眠っているのだ。

さて、ここで問題です。この居眠り姫を起こすにはどうすればいいでしょうか？

「……あつ！ あんなところにレア物の同人誌が！」

ガバツ！

「何ッ!? どこどこ!? オレの同人誌イイイ!!」

正解は『物で釣る』である。

「そんな物、学校にあるわけないでしょう」

首をぶんぶん振って辺りを見回している月奈に、コンツと瓶子は手を手刀に変えて月奈の頭に軽く乗せた。

月奈がゆっくりと後ろを振り返ると、そこにはムツとしかめ面をした瓶子の顔がある。(しかめ面をしているにも関わらず、何故か周囲の男子から「可愛い」だなんだとボソボソと聞こえる)

「おはよう、月奈……」

「ん……おーッ、オハヨウゴザイマス、セイトカイチョー」

にもかかわらず、テンション高めで挨拶をする月奈。しかも、何故だかまたビシッと敬礼をしている。

「だから、その呼び方で呼ばないでって何度も言ってるでしょう。……はあ、まあいいわ。さ、お昼を買いに行きましょう？ あ、そうそう。今日も“あなたの分を選んであげる”から」

「ッ！？ まさかまた『野菜満載！ 栄養たっぷり夏野菜カレー』とかじゃないですよNE！？」

「あら、あなたカレー嫌いだったっけ？ 私は大好きだけど？」

「そうじゃねエーだろ！？ ってか、マジか！？ マジかよー！？ マジなんですかアアア！！？」

口調を変えて綺麗に三段活用を決めた月奈を、瓶子がうるさいと一言でいなす。

しかし、月奈も負けじと一息吸うと

「カレーなのに緑色だし肉は入ってないし何よりカレーじゃなくて青汁みたいな味がして不味すぎるでしょ、姉貴イー!!!」

凄い早口で『カレー』についての感想を言っていく月奈。正直何言っているか聞き取れない程早かった。

「またあんなの食べるくらいなら、死んで死後の世界に逝ってやるーッ!!!」

それぐらいことで命を無駄にしない、と間髪いれずにツッコむ瓶子。

「どうやら売店の（何だそのカレー、とツッコミたくなる）『カレー』は月奈にとってあまり好評ではないようだ。というか、そんなものが売店に売っているという事実が不思議でしょうがない。」

「大体、あなたいつも栄養の良いもの食べてないでしょ。私はあなたのことを思って選んであげてるのよ?」

「いやいや、具が野菜だけでルーが青汁みたいなカレーを食べるのも栄養が良いとは思えないんだけど!? やっぱり昼飯って言ったら普通、パフェといちご牛乳だろッ!」

「パフェもいちご牛乳も高校の売店には売っているわけないでしょっ!」

カレーが売ってあっといういちご牛乳を売っていない売店も珍しい。

「大体、何処が普通よ。栄養が偏りすぎじゃない。昼食としてなっていないわ。それとも何？ 糖尿病にでもなりたいの？」

「うるせエー！ こちとら当分ねエーと生きていけねエー程の甘党なんだよ！ くそーッ！ こんな時食堂でもあればあんなモン食わなくてすむのにーッ！！ あア、食堂のおばちゃんが栄養を考えて作ってくれる料理はさぞかしうまいんだろうな……」

「私立でもないのに、そんなものがあるわけないでしょ」

「あア〜！ たまには天 ちゃんが“うまいわ……”と言った激辛麻婆豆腐を食ってみたいぜーッ！！」

「……それって確か超激辛って言ってなかったっけ？ あなたさっき甘党って言ってたわよね？」

「んなモン知らん！」

「自分の発言に責任を持ちなさいっ！」

と、こんな感じで教室内でギャーギャーと騒いでいるうちにいつの間にか一時五十五分を迎えていた。

とりあえずこのままではラチが開かないので、二人は騒ぐのをやめてとりあえず売店へ向かうことにする。

屋上

二人は、いつも昼食を食べている場所、屋上へと昼食の入ったビールを持ってやってきた。

誰もいない。しかも、屋上はとても殺風景で、少し寂しい気持ちになる。

時刻は一二時〇七分。

お忘れな人もいると思うが、今日は九月一日。九月とは言え、まだ初日だ。殆ど八月と変わらない。だから日差しは強く、気温は軽く三〇度越えでとても暑い。

誰も屋上にいないのも、こんな猛暑に外に出るなんて自殺行為をするような人がいないからだ。しかも校舎内にはどのような環境であつても快適に過ごせるように、色々な機器（室温調節機や空調機などといった物）が二四時間体制で作動している。そのため、「校舎内が暑いから外に出る」などと言つた「そんな時代遅れな行為」をしなくても良いのだ。というか、まず、出ようとは考えない。

それなのに　二人は屋上にいる。

「うん……今日もいい天気ね」

日光を浴びて、うんと気持ちよく伸びをしている瓶子だが、月奈は暑くて今にもぶっ倒れそうな感じだ。

「ッたく、こんなまだまだ暑い日に外で昼食なんてどうかしてます

Z E、セイトカイチヨーさんはよー。あなたはあれですか、ドMなんですか？ こんなクソ暑いなかで更にクソ暑さを求めるなんて、ドMとしか思いませんZ E」

いやいや気分であな垂れている月奈は、とりあえず直射日光を浴びるのはきついたので、日陰を見つけてそこに腰を下ろした。それに続き瓶子もその隣に座る。

「誰がドMよ」

瓶子が言うと、二人はビニールの中に入っている売店で買った昼食を取り出す。

瓶子は栄養満点の野菜ジュースと具沢山のサンドイッチである。これだけでも、瓶子としては腹八分ぐらいまで溜まるのである。

一方、月奈は菓子パンを3つと牛乳で、瓶子と比べると凄く栄養の偏った昼食である。

「まったく……またあなたはそんな栄養の悪いものを……」

「オレのエネルギー源は糖分と炭水化物なのだよ！」

意味の分からないことを言っはっはっは！と笑う月奈。最終的に月奈は甘党らしい。

笑い終わると月奈は一つのパンを一口かじる。

この炎天下のせいで喉が渇く。そのため、直ぐに口に含んだパンを牛乳で流し込み、飲み込むと共に喉も潤す。

「ふうー……それにしてもあっちイーな……」

月奈はそう言って、ビニールの中から下敷きを取り出した。この

猛暑の中、少しでも涼むために教室から持ってきていたのだ。早速月奈はパタパタと扇いで風を遅らせる。とはいっても、この猛暑のせいでぬるい風しか送られてこないのだが。

「そう?」

平然とサンドイッチを食べている瓶子。

月奈はこの暑さで、流したくない汗を掻いているというのに、瓶子は汗どころか涼しげな様子である。

「それで、夏休みはどうだった?」

瓶子が月奈に話を振った。

月奈は二つ目の菓子パンを口に含んで

「ふえふあふいいふあほおーり」

「ちゃんと口の中のを飲み込んでから喋りなさい」

二、三度噛み、飲み込み改めて言う。

「今朝言ったとおりだZE。アニメ見てマンガ読んでラノベ読んでゲームして夏ミ行つてライブ行って……結構忙しい夏休みだったZE!」

「……この長い夏休み。ホントにそんなことだけにしか、時間を費やしていないの?」

「……うん」

「はあ……………」

今朝よりも大きな大きなため息をつく瓶子。そんな瓶子のことは気にも留めず、二つ目のパンをたいらげ三つ目の菓子パンを口にする月奈。

「ま、あなたが良いならそれでいいけど…………でも、覚えてる？ 明日からテストよ？」

「ッ！？ ゲホゲホッ！！？」

嫌な単語を聞いた気がする。

いや、聞いたに違いない。何せパンを喉に詰まらせる程なのだから。

しかし、念のためにもう一度聞いておこう。

「だから、明日から二日間テストなのよ」

「……………」

終わった。そう月奈は思った。

今朝にも言ったが、夏休み中家に閉じこもってオタク生活三昧だった月奈は、勉強どころか宿題なんてものもやった覚えがない。否、やっていない。そんなものをやる時間ですら、彼女にとっては惜しいものなのだから。

「…………ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

そして、一人の少女の絶叫がコダマタウン中にこだましていた。

第6話 初日（九月一日） 前編（後書き）

いろいろ手こずってました。すみませんm(´▽`)m

月奈の口調を決めるまでに凄く時間かかったんです。最終的にこれになりましたけどw

瓶子の名前についてですが、ノータッチでお願いします。

後編は半分ほどできているので、早めに上げられると思います。

第7話 初日（九月一日） 後編（前書き）

なんか凄い時間掛かって最後なげやり……

第7話 初日（九月一日） 後編

午後一時過ぎ

今日の学校は午前中だけだったのでお昼を終えたら帰ることになっていた。

別にお昼をとらずに帰ってもよかったのだが、月奈と瓶子はそうしなかった。理由は簡単だ。

月奈曰く、自分で昼食を作るのがめんどいらしい。

瓶子の場合は別にめんどくさいわけではない。

家に帰れば家族がいる。だから、温かいご飯が待っているわけだが、月奈の場合は違う。

両親とは別れて生活しているのだ。別に仲が悪いとか、家庭内が上手くいっていないとかいうわけではない。ただ単に、『一人暮らしが良い』という変な理由で別れて生活しているのだ。

それならと瓶子は「うちで食べていく？」と誘ったのだが、「だが、断わる！」と月奈が断ったためしょうがなく学校で昼食をとったのだ。

その月奈は学校を後にし、制服でコダマタウン市街を歩いている。

「さーて、どーすっかなア？」

只今絶賛一人でお散歩中。それは『暇』とイコールで結ばれていることを意味する。

だが、実は月奈、瓶子に「あなたのために勉強会を開いてあげるわ」ということと呼ばれていたりする。しかし、約束の時間は三時と約二時間も時間がある。そのため不思議と自由（というか暇）な時間が生じてしまって、何をするか迷っているところで現在に至る。

「とりあえず、ブラブラするか」

『ボクは博物館に行ってみたいな』

「おー。イイNE て、は？」

不意に、月奈のカバンの中に入っているスターキャリアーから幼い声がした。

「あ、そついや『ピエロ』のことを忘れてた」

あることを思い出す。

そして、直ぐにスターキャリアーをカバンから取り出すと同時に覗きこむ。

そこには、サーカスの曲芸を披露する道化師『クラウン』のような姿をした電波体があった。人間でいう化粧をしているような感じだ。しかし、目には涙マークがあるため『クラウン』ではなく『ピエロ』という方が適切であろう。

この電波体の名前は見た目どおり『ピエロ』という。

「ヤッホー」

『ヤッホー じゃないよ……ボクのこと忘れてたでしょ？』

「ヤハハ……返す言葉もございません、はい……」

最後に面目ないと付け足す月奈。

忘れていたことに腹を立てているピエロはムスツとした顔になる。

「ドキンッ！ 何ソレ可愛い！ 一枚頂きますZE！！」

瞬時に、瞬間的に、一瞬にして、瞬く間にカバンからサツと最新型のデジタルカメラを取り出すと、ピエロに断りも入れずにシャッターを切る。その間に掛かった時間は約一秒。

『主……何でカメラを……？』

誰もが思う疑問を月奈にぶつけるピエロ。

月奈はニシシと不気味に不適に笑いながらこう答える。

「オレは『萌え』を追求しているのだよ、ピエロくん」

『いや、「初步的な推理なのだよ、ワト ン君」みたいな感じに言われてもどう反応していいかわからないから』

コホン、と一拍おくと、

「オレにとっては『萌え』をカメラに収めるなど基本中の基本。しかし、それは何時何処で誰が発生させるか分からない。だからオレはデジカメをデフォルトで備え、常日頃から何時『萌え』発生に備えカメラに収められるようにしているのだよ！」

『……そうなんだ』

『萌え』を熱く語っている月奈が……うつとしい。

とりあえず話題を変えようと、先程した提案を繰り返す。

『ボク博物館行ってみたいんだけど』

「ん、イイZEE！ 行くか！」

腕を上げてオーと叫ぶ月奈。

周囲に誰もいないことが幸いし、「誰この人？」的な視線浴びることはなかった。

そんなこんなで現在進行形で博物館に向かっている月奈とピエロ。道中、月奈はピエロについて疑問になっていた事があったので質問する。

「オマエってさ、自分のこと“ボク”って言ってるけど性別（でいいのかな？）って女だよな？」

『うん、そうだよ』

「カーツ！ ボクツ子とはまた萌えるNE！！」

そんなことを言っていると二人はコダマタウンの博物館の前へと到着した。

しかし、様子が変だった。

「入れない？」

何故だか出入り口は「立ち入り禁止」やら「KEEP OUT」と書かれた黄色い立ち入り禁止テープで封鎖してある。刑事ドラマでよく見る“事件現場に民間人を立ち入りさせない”という雰囲気が出ている。

それから、人だかり出来ていた。月奈の女の子の体では、他の体格のいい大人に体格負けしてしまうため出入り口に近づけない。

そして何より、サテラポリスが右往左往と駆け巡っている。これだけ様子がおかしければある事がわかるだろう。そう、事件が起きているのだ、と。

「オイオイ、何事ですかい？」

ドゴォーン！！

刹那、博物館のどこからか崩れるような轟音が響いた。

「ッ！？」

驚愕する月奈。否、周囲にいた人々の殆どが驚愕していた。

『主。どうやら、電波空間で電波ウィルスが悪さをしているらしいよ』

どうつでもよさげにピエロは告げる。

その言葉を聞いて、ニヤリと薄く笑みを浮かべる少女が　　「」にいた。

「ハハーン、なるほど。ウィルスのが暴れてる、と。ということとはこの事件を解決するためには正義のヒーローが必要ということですよNE?」

『そんな人、何処にいるの?』

その言葉に更に笑みを増す月奈。

「」

そういつと月奈は、親指を立てて自分の胸にあてる。その様子を見て、ピエロは月奈が言いたいことがわかったようだ。薄く笑っているのが丸見えだ。

「というわけで、電波変換ヨロシクー！」

『……しょうがないなあー』

しょうがない、と言っているピエロではあるが、何やら楽しげな表情を浮かべている。

月奈は、ここでは場所が悪いと判断したため場所を移動する。移動した場所は、博物館の近くにあるビルの陰。

誰もいないことを周りを見て確認する。直後、自分のスターキャリアーを胸の前に出す。

「電波変換！ 聖堂月奈 オン・エア！！」

三原色（赤、黄、青色）の光に包まれる月奈。

光が晴れると、カラフルな姿をした電波人間が現れる。

左手に小さな杖スティックを持った電波人間は、サーカスに出現する『ピエロ』に似ていた。

身には黄色をベースとし、加えて右袖は青色、左袖は赤色のジャケット。黒色をベースとしているズボンに背中には白いマント。

頭には白い小さめのシルクハットを斜めにかぶり、左目を除き顔を黒い仮面で覆っている。そして覆っていない左目にはモノクルを付けている。

『ピエロ』 『手品師』のような姿だった。

実はこの姿、まだ名前は決まっていない。

「イヤッファー！ やっぱこれいいア！！ コスプレイヤーになっ
たみたいだＺＥ！！！」

実際のコスプレイヤーはこのような格好はせず、アニメのキャラ
の格好をするのだが、そんなことはどうでもいい。月奈がいつてい
るのは気分のことなのだから。

「うっし！ それじゃ、いつちよ行きますか！！！」

右手をガッツポーズにし、気合をいれる。

そして、周波数を変えて博物館の中へと移動する。

博物館内

先程、崩れるような音が響いたところへやってきた。

音が響いたとおり、天井にはかなりの大きさの穴出来ていて、そ
の下には瓦礫が散乱していた。

そして ウィルスがいた。

ざっと見ると十数体。あまり多くはない数だった。

「おう、思っていた以上に少ないなア。あ、もしかして他の奴帰っ
て君たちだけで残業？ お勤めご苦労様です！」

ウィルス相手にまで敬礼をする月奈。どこまでがボケなのか、常人じゃ判断出来ないほど本気で言葉を発している。

それを聞いたウィルス達はというと、月奈の行動が理解できないのか首をかしげている。

『あゝるじ〜？ さっさとやっっちゃおうよ』

左手で持っているスティックからピエロの声が聞こえた。声から察するに、ウズウズしている様子が伺える。

「オーケー。ほいじゃ」

ザクッ

1体のウィルスの額に、四角て薄い何かが刺さった。

「 戦闘開始 」

同時にウィルスがデリートされた。四角て薄い何かがヒラヒラと舞い落ちる。

それは電波で出来たランプのカードだった。

そのカードは、月奈が懐から素早く出して投げた物。

人差し指と中指の間に挟んで取り出し、手のスナップで敵に投げる。これだけで十分ウィルスはデリートされる。一体をデリートするのにも僅か一秒も掛からない。

「お次はど・な・た？」

そういつて懐に右手を入れ、五本の指と指の間にカードを挟み四枚取り出す。

それを見てウィルスは危機感を感じた。
直ぐに自分たちの敵に攻撃を繰り返した。このまま簡単にデリートされるわけにはいかない。

同時に、トランプをウィルスの数だけ投げた。

しかし、そのトランプはウィルスには当たらず、検討違いの方向へ飛んでいった。

好機^{チャンス}。どのウィルスもそう思ったはずだ。敵は投げた時にできた隙がある。そこを狙わないわけにはいかない。

全ての数のウィルスは飛び掛った。一斉攻撃を繰り返せば、敵もただでは済まない。

だが、

「う・し・ろく」

急に背後から何かがつき刺さった。敵は前にいるのに。

瞬間、ウィルスはデリートされた。一体一体に背中に刺さったトランプのせいだ。

『なーんだ。ほんとに早く終わっちゃったね。まだカードスラッシュヤーと操りしか使ってないのに』

「やっぱり経験値がおいしくないザコじゃ、こんなもんですNE。もっとウマウマな敵も欲しかったけど、贅沢いっちゃいけませんE?。」

倒すのは簡単だった。

強い攻撃を加えるまでもなかった。

ただトランプを投げた。

そして、操る。

瞬間的にトランプは意思を持っているかのように、敵の背に突き刺さった。もちろん実際は意思は持っていない。月奈がトランプを操ったのだ。まるで、人形でも操っているかのように正確に。

操り人形の糸を使う代わりに電波で作った糸状の物を使って……。

「にしても、あんなザコの攻撃じゃ、こんなにならないよNE
……天井」

上を向いて呟く月奈。

それから視線を下ろすと、粉碎されたガラスケースを見つけた。

近づいてみると、そこにはこう書かれていた。

World
of
Bersek
ベルセルクの剣

どうやらこのガラスケースに展示されていたはずの展示品が何者かの手によって盗まれたようだ。

天井を壊したのも同一犯。

『どうやら、ボク達のような電波人間の仕業のようだね。残留電波も残ってるし』

間髪を入れずにピエロが言う。そして、それから、と付け足す。

『まだ残留電波が残ってるみたいだし、これを追えば誰が壊したのかもわかるかもね』

「おお、犯人探しですか！ イイNE、イイNE、最高だNE！
……フッフ、オレのテンションが有頂天に達したアアア！！」

「頂点」と言いたかったのだが、勘弁してやってくれ。

コダマタウン市街

電波変換を解き、カバン片手に残留電波を辿っていくうちに市街を歩く羽目になった。

ピエロの話じゃ残留電波が弱まりつつあるらしい。何でも、お探しの電波人間が電波変換を解いたんだとか。それでも探せない事はないにしろ、ほとんど微弱だから探しにくいんだとか。

「うーん、今何時？」

スターキャリアーに覗き込む。

『二時三二分だね』

そろそろ約束の時間に迫っていた。

実はもうかれこれ三〇分も探している。これだけ探しても見つからないのだから、探すのはまた今度にして、約束重視に瓶子の家に行くほうが良いかもしれない。

「うーん、どうすっかなー」

途端にドンツと誰かとぶつかった。

「ッ

」

前から誰かきていることに気づかなかった。無理もない。ぶつかった相手は月奈より背の低い小学生なのだから。赤い服にグレー短パン。頭はツンツンで緑のサングラスを乗せている。そして、ウェーブスキャナーを手に持っていた。

「あ、すみません！」

幼い声。背は五年生ぐらいでも声は子供だ。

なんだか　萌える。

「おう、今度からは気をつけるよ」

そう言っつて月奈は少年の横を通り過ぎていく。

月奈は幼い少年に興ふ……もとい、失いかけていたテンションが復活し、気分が良くなった。

歌でも歌って帰ろう、そんな気分。

「放て、心に刻んだ夢を未来さえ置き去りにして」

夏休みに見ていたアニメにこんな神OPがあったことを思い出し、自然とその歌の歌詞が出ていた。

実は大好きなボカロと迷ったのだが、この歌のリズムが耳に残っていて、この歌を選んだのだ。

そんなことはどうでもいい。

通り過ぎて数歩歩いた時、スターキャリアーから声が聞こえた。

「見つけた。あの子だ！」

「え？　どの子？」

ピエロの声で後ろを振り返る月奈。

見渡す限り あの子の少年しかいない。

まさか、あの子なのか？ あの子が 犯人！？

『あの子とすれ違うときに微かだけど、博物館に残っていた残留電波と同じものを感じたよ。今改めてわかった。この電波はボク同じ電波体を出す電波。微かに感じないのはたぶん、スターキャリアーの中にいるからだと思う』

ピエロが言い終わると同時に、パトカーが一台、彼の隣で停止した。

パトカーの窓が開き、何やら運転手と話しを始めた。

「……………どーすつかニヤー」

『主。なんで“にやー”？』

そんなことはスルーして、月奈は考え込む。

この後、あの少年をつけるべきか。それとも、見てみぬふりをするか。

「……………」

今までプレイしてきたギャルゲーより難しい選択肢だが、ここで判断をミスるわけにはいかない、と心で呟く。

つけたところで何か情報があかめるかもしれない。が、敵（もしくは博物館を襲った犯人）かわからない以上、リスクがあることも理解している。

そして、時間もない。

スターキャリアーの電波時計を除き込むと、瓶子との約束の時間まであと一〇分。

瓶子との約束を守るためにも、ここはスルーするか。
だが、

「……だからと言ってスルーするわけにもいかないんだよNE……」

せつかく見つけた手掛かりを棒に振るわけにいかない。

そのとき、昔アニメ聞いたことがある台詞が頭をよぎる。

『悪は絶対許さない』

こんな幼稚な台詞、何のアニメでいつ聞いたのかすら覚えていない。
い。

でも、確かに悪を絶対許すわけにはいかない。

「……なんていうか、オレもまだまだ幼稚なんだな」

決心は着いた。

あの子を探る。

だが、だからと言って今から尾行したりはしない。

月奈は普通の高校一年生。

相手は自分より年したとは言え、何の準備も整えずに後をつけるなんてバカげている。そんなこと、二次元にしか興味がないような月奈でもわかる。

そして、これは二次元アニメではない。三次元リアルだ。

でも 準備を整えた後ならば話しは別だ。

「……………」

音も立てずに最新型デジカムを取り出して、瞬く間にシャッターを切る。

月奈は後日、『準備を整えて探ろう』と決意した。だが、そのためにはまずもう一度ツンツン頭の少年を探さなくてはならない。その探す手間を少しでも省けるようにと顔写真を残していたのだ。まあ、それで簡単に素早く見つけ出せるのかと言えば、正直自信がない。しかし、写真を残しておくだけでも損はない。

バタンツ

少年がパトカーに乗ったのは、月奈がシャッターを切った直後だった。

更に直後、パトカーは少年を乗せてどこかへと走り去っていく。

「ふう……」

安堵をつく月奈。

彼女なりに緊張して少し疲れたようだ。

『ていうかさあ、主。相手に許可なく撮影することをさあ……盗撮っていうんじゃない?』

「……………」

盗撮……そんな言葉を聞いたことがあるような気がする。

確か、『被写体、または対象物の管理者に了解を得ずにひそかに撮影を行うこと。あるいは撮影を禁じられた美術品などでの撮影や、映画館などで上映中の映画をビデオカメラなどで撮影すること。隠し撮りとも言つ』とか、なんとか……。

誰が見てもれっきとした犯罪である。

「さ、さア、そろそろいかないと約束に間に合わなくなるＺＥ！」
『ジュー……』

あは、あははと冷や汗ダラダラと掻いている月奈。
とりあえず、本気で瓶子との約束の時間を守れなさそうなので、
この話しをここで打ち切り瓶子の家に猛ダッシュすることにする。
このままこの話しが続くこともあれなのだが、瓶子を待たせると
つとおつかないことになる。

去年、約束の時間を五分遅刻しただけで投げ飛ばされたほどだ。
奴は柔道五段に剣道六段（その他諸々）だった気がする、と記憶を
探る。

そういうわけでなんとしても遅刻するわけにはいかない月奈は、
この炎天下の中汗びっしょりで走ることになったわけだ。

こうして、月奈の夏休み明けの九月一日の出来事は一通り幕を閉
じる。

月奈の物語は　　ここから始まる。

第7話 初日（九月一日） 後編（後書き）

なんか最後超うざいですけど、これしか思いつかなかったんで許してくださいw

次話はたぶん亜夢のお話しになると思います。今のうちにジャスミンの伏線はつとかないと次作で大変に……

第8話 キョウウダイ

九月一日午後五時五二分。

水星亜夢は公園のベンチに座っていた。

「うーん……」

と、両腕を上げ、伸びをする亜夢。

博物館でのウィルス事件の後、皆と別れた亜夢は仕事へ行く前に休憩がてら公園に立ち寄っていた。

何故公園かと言うと、亜夢はアイドルという立場でありながら今は変装していない。なので、多くの人に見つかるのは少々面倒なことになる。そのためなるべく人気の少ない公園にいるのだ。

ここは予想通り人気が少ない。

この公園には滑り台、ブランコ、ジャングルジム、砂場などの子供の遊び場などがある。

その公園のブランコに子供が二人。

小学一年生ぐらいの男の子と男の子より一つ下ぐらいの女の子だ。どうやら兄妹らしい。

「……………」

亜夢はその兄妹を少し悲しげな表情で見つめている。

『どつしたの亜夢ちゃん？』

不意にスターキャリアーからジャスミンが声を掛けてきた。

「え？ ……ああ、ううん」

首を横に振る亜夢。直後に、ただ、と付け加える。

「少し……昔の事、思い出しちゃって……」

『昔の事?』

「うん……妹がいた頃の……」

昔の事。

妹がいた頃。

亜夢には数年前に妹がいたという記憶がある。

両親妹ともに車の事故がきっかけで亡くしている。

その事故以前には妹と遊んだ記憶があり、今でもよく覚えている。

妹の顔を一時も忘れたことはない。楽しかったころの記憶。亜夢

にとつて、それは忘れることのできない大切な記憶なのだ。

『……そっか。亜夢ちゃんにも妹がいたんだっけ』

「……うん」

ジャスミンの言葉に小さく頷いた。それからジャスミンが続ける。

『実はね……私にも妹がいるの』

「えッ!？」

ジャスミンの一言に思わず声が漏れた。

そんな事、今まで聞いたこともなかったことだ。驚くのも無理はない。

「妹って……FM星人にもいるんだ!？」

『FM星人にだって地球人と同じように両親、姉妹、子供、家族と呼べるものがあるわ』

その事については全く初耳だったが、考えてみればいてもおかしくないと思ふ。

FM星人だって生きているのだ。誰かに命を与えられ、育てられている。機械で生産されているわけではない。親と呼べる者がいたから生まれている。

そう考えれば妹だつていてもおかしくないといえる、はずだ。

丁度その頃六時のチャイムが鳴り出した(夏の日、日が暗くなるのも遅いのでチャイムは六時になるらしい)。そのチャイムを聞いて、ブランコに座っていた幼い子供が公園の出口へと向かっていくのが見える。二人とも笑顔で手をつなぎ、今日のご飯は何だろうね?と晩御飯の話しをしながら公園を出て行った。

それを微笑みながら見送る亜夢はそつと目を瞑る。

「……そっか」

でもね、とジャスミンは言う。

『……亜夢ちゃんみたいに妹と一度も仲良くしたことなんてないの。それどころか……顔を合わせれば喧嘩ばかり』

「え?」

その言葉により、瞑っていたが見開いた。

姉妹ならば喧嘩することは多々あるだろう。しかし、一度も仲良

くした事がないなどという事はありえないのではないだろうか。

「そ、そんなの嘘じゃんツ、ありえないでしょ!？」

動揺しながらも、そう言った。

ありえない。

それはジャスミンの言った嘘、冗談。

亜夢はそう思った。そう思いたかった。

『……そうだと良かったのにね』

儂げに、寂しげに、そして悲しげにそう呟いた。

唐突に冷たい風が吹きぬける。

昼時はまだ蒸し暑かった割に夕方になると、涼しさを飛び越え肌寒いほどの気温になっていた。

八月は終わったとはいえ、まだ九月初日。ここまで気温が寒くなるはずはないのだが。

「……………」

亜夢は何も言わない。

ジャスミンの顔を見ればわかる。冗談でいつてるんじゃない。

亜夢はこれ以上追及はしない、のではない。できないのだ。

姉妹なのに仲良くしたことがないなんて、どれだけつらかっただろうか。苦しかっただろうか。それは途轍もなく、寂しかったんじゃないだろうか。

それは妹とずっと仲良くしていた亜夢には想像できないほどのつらさの筈だ。仲が良かった亜夢とは正反対に仲が悪かったのだから。

『でもね、いいのよ亜夢ちゃん』

ジャスミンは笑顔を作った。亜夢に悲しい顔をしてほしくなくて、そんな悲しい記憶を押し殺すように笑顔を作った。

『私はそんなこと気にしてないわ。第一、私はあの子が嫌いだもの』

嘘。ただの強がり……そんな気がした。

笑顔だって作りもの。しかし、亜夢は何も返すことができずにずっとジャスミンを見据えていた。

代わりに

「ッ！」

亜夢がいた場所が閃光を発しながら 爆発した。

「……………危なかった」

爆発する直前に電波変換でジャスミン・ハートに変身した亜夢は、ウェーブロードから爆発した場所を見下ろしていた。

一歩遅ければ確実に爆発に巻き込まれて木端微塵だったであろう。

「……………」

亜夢は見ていた。爆発する直前に、周波数を変えてこちらに向かってきたミサイルを。あれは確かレーザーミサイルというバトルカードだったはずだ。

瞬時に悟った。

自分は誰かに『狙われている』。それもバトルカードを使うこと

ができる電波人間に。

一般人は、バトルカードを使う事はできるが、周波数を変えて人間を狙うことはできない。そのため相手は電波人間であることに間違いはない。だが、しかし。誰がこんなことを？

『亜夢ちゃん、大丈夫？』

「うん。なんとかね……」

ジャスミンの問いに考え事をしながら答える。

『電波人間ね？』

「だろうね」

ジャスミンも感じていたようだ。

ジャスミン・ハートは周りの電波が乱れていないかをジャスミンに確かめてもらう。もし乱れていれば、そこには電波人間がいるはずだ。電波人間が発する微弱な電波が周りの電波を乱れさせるはずだから。サテラポリスの五陽田警部もこの電波を頼りに頭のパトライトを鳴らしている……らしい。微弱な電波を発して電波を乱すものは他にもあり、バトルカードの効果で出現した武器やウイルスもその一種だ。

『ッ！ 亜夢ちゃん、九時の方向！』

「ッ ！？」

直ぐにジャスミンの言う方角に目を向けた 瞬間、眼前にさつきと同系統のミサイルがそこはあった。

刹那、その場所から凄まじい爆発が起き、黒煙が張られた。

「……… ったく！ 何なのよ、もう！…！」

ジャスミン・ハートは、先程いた黒煙が上がっているウェーブロードとは違うウェーブロードで吐き捨てるように言った。ミサイルはジャスミン・ハートより数メートル先のビルの影から発射されたものようだ。

先程のミサイルは普通ならば避けきれない程距離を詰めていた。そう、普通の電波人間であれば。

ジャスミン・ハートは直撃の寸前で『風の舞 風速』を使ったのだ。『風速』を使うことにより、風を操り追い風を使用することによって何倍ものスピードで動く事ができる。これを使ってさっきのミサイルを軽々と避けていた。

「コソコソやってないでさっさと出てきなさいよ！ あんな不意打ちじみた攻撃、あたしには通用しないわよ！…！」

苛々していた。

不意打ちじみた攻撃を二回もしてくる上にビルの影から姿を現さない。そんな得体の知れない敵に、だんだんと腹が立ってきてた。

『落ち着いて亜夢ちゃん。敵が分からない以上、迂闊に攻撃するは危険よ』

今にも攻撃しそうなジャスミン・ハートに落ち着くように指示をする。彼女はそれなりに冷静のようではある。

「ッ……… わかってる」

そうは返すが、どうも落ち着かない。攻撃は止まったが姿を現す気配がない。それがさらに亜夢の苛々を誘う。

ふと思い出して空を見る。まだ日は沈んでいない。今の時期の日の位置と沈むスピードから計算すれば、おおよそ日が沈んでしまうには三〇分程度かかりそうだ。

これならば闇に支配される心配はないであろう。

一度は闇に勝ったとはいえ、もう二度支配されないとはい限らない。念には念をいれて注意しておいたほうがよい。しかし、この分なら心配はない。三〇分以内にケリをつければよいのだから。

「……………?」

おかしい。ビルの影から何かがある気配がない。

ジャスマンにもう一度確認してもらったが、その位置の電波が乱れていることは確かのようにだ。

つまり、そこには何かがある。それが亜夢を狙った者、いうならば敵がいるはず なのだが。

だが 気配がない。恐ろしいほどに気配がまったく感じられない。まるで、そこには何もなにかのように。

……おそろおそろ近づいてみることにした。

ゴクリ、とジャスマン・ハートは息を飲む。

一歩ずつ、一歩ずつ。少しずつではあるが距離を詰める。

そして ビルの影一歩手前までやってきた。

意を決しッてバツ、とビルの影に飛び込んだ。

「……………?」

そこにあつたのは 残り一秒を示していた、バトルカード・カ
ウントボムだった。

先ほど言ったように、電波を乱すものは電波人間以外のものにも
色々ある。例えば、ウィルスとかバトルカードによって出現した武
器^{ダン}とか

刹那

ドカアアアアアンツ！！

爆発した。

「くっそー！！ 騙されたあああ！！」

カウントボムが爆発した場所よりだいぶ離れたウェーブロードで
ジャスミン・ハートは叫んでいた。

勿論先程の爆発も軽々と避けていた。

『でも……亜夢ちゃんを狙ったのは誰だったのかしら……？ 悪戯
……かしらっ？』

悪戯にしては夕チが悪すぎる。
まず、そんなに電波変換できる者がいるはずがない。

「……はあ」

大きなため息をつく亜夢。

超面倒くさい、ということとで敵を探すことを断念することにした。
また狙われたとしても、その時に返り討ちにすればいいのだからと
言い訳をして。それにそろそろ仕事場に向かわないといけない。

「……まあいつか」

と呟き、電波変換したままウエーブロードを利用して仕事場まで
移動することにした。正直、電波変換を解いて移動するのは時間が
かかるうえに効率が悪い。一番の理由としては超がつくほどだるい。

『あら？』

すると急に扇子姿のジャスミンが声を上げた。

声のトーンから先程の犯人を見つけたとかではなさそうだが。

「どうしたの？」

『さっきは気付かなかったけど、一度着信があったみたいね』

「ん、誰から？」

『え〜っと……どうやら相手はスバル君だったみたいね』

その言葉でちょっとドキッと跳ね上がった亜夢。

亜夢はある一件以来、スバルに好意を抱いている。まあ、スバルにそんな事気付いて貰っていないのだが。

『あら、亜夢ちゃん？ お顔が真っ赤よ？』

ニヤニヤとした口調で亜夢を弄りだすジャスミン。動揺しながらも、うるさい！、と返す亜夢だが、指摘されたためか更に一段と顔を赤く染め上げる。

「ああー！ くっそー、今度は捕まえてやる！！」

話しをはぐらかそうとそんな事を叫んだ。理由としては『襲われたから』もあるだろうが、それにも増して『スバルの電話に出られなかった』ということもある。

とりあえず、仕事が終わってからも掛けなおしてみようと考えた。何故仕事が終わってからのかと言うと、心の準備ができていないんだとか。電話一本でおいおい、とツツコミたくなるが、彼女も女の子だ。好きな男に電話すると言うことはそれ相応の準備がいる、らしい。

こうして、長い長い九月一日が終わっていくのだった

まだ何も知らない『水星亜夢』の一日、は。

第8話 キヨウダイ（後書き）

遅くなりました！><；

これがめっちゃ時間掛かったお話しです。何の変哲もない普通の話
しでございましょう？ しかし、伏線バリバリに張ってあって、次
回作でちよこちよこ拾っていきます、はい。

いやあ、これ書くのにどれだけ時間掛かったか（まあ私生活が忙し
いのもあったんですけど）。

ジャスミンの妹……感のいい人なら直ぐわかりますよ。t w i t t
e rでもそんな話ししてた気がするし

今回は亜夢に視点を置きました。地の文の書き方は変わりませんけ
どね（前にそれをやって失敗したことは言わないでおく）。まあ
何で亜夢を狙ったのか、誰が狙ったのかは次作で明かしていきます。
この話し、意外と重要なんですよねw

第9話 ベルセルクの剣(前書き)

というわけで更新2話目

第9話 ベルセルクの剣

九月二日

今日は土曜日の星河スバルは、朝からアマケンに来ていた。

理由としては、昨日天地に預けたウォーロックを引き取りにきたのと、ウォーロックの体内にあるベルセルクの剣について調べてもらったためである。

ウォーロックが拘束……もとい、寝かされているシエルターの隣にあるディスプレイの前にスバルと天地は移動する。すると天地はスターキャリアーを操作し、ディスプレイに何か波形のようなものを映し出した。これが何を表しているのかよくわからないが、なんだかメーターのようなものがレッドゾーンに達していることから、かなりやばい感じだということを理解するスバル。

「天地さん、なにこれ？」

とりあえずこれが何を表しているのかという疑問をぶつけてみる。

「これは電波を計測するセンサーなんだが……見ての通り、あまりの高エネルギーにセンサーがいかれてしまっただね」

なるほど。それでメーターがはち切れんばかりに波形の波を打っているわけか、とそこまで推測してから本題に入る。

「それで、オーパーツは取り出せるの？」

うん、と悩んだ末に天地は口を開く。

「……難しいだろう。ウォーロックの全身にエネルギー反応が及んでいることから考えると、一部が彼と同化している可能性がある。無理に取り出そうとすれば彼に危険が及ぶかもしれない」

「そんなものを……」

『なんだよ！ その「また面倒くさい事をしてくれた」とでも言いたげな目は』

ウォーロックだ。

シエルターの中で横たわっている体制からスバルに向けていい放つ。

「……別に」

『チッ』

「はっはっは！」

スバルはそっぽを向き、ウォーロックは舌打ちをする光景に、何がおもしろいのか天地は笑っている。

その後天地はとにかく、と続ける。

「ウォーロックや電波変換に悪い影響を与える物ではなさそうだ。暫く様子を見てみよう」

「はい。とりあえず良かったじゃないか、ウォーロック」

シエルターからスターキャリアーにウォーロックを戻す。

スバルの言うとおり、何も影響を与えないのなら別に問題はない

わけだが

「よくないよ、スバル君」

と天地は言う。

「取り出せないということは、これからも君達はベルセルクの剣を奪おうとする奴らから狙われ続けるんだよ？」

「あ、そっか」

そうだった、とスバルは九月一日きのうの事を思い出す。

ベルセルクの剣を狙って現れたファントム・ブラック、イエティ・ブリザード。

そしてデンサン大学に現れた強敵、ブライ。そしてブライの仲間だと思われる天使のような姿の電波人間。

こんな奴らからこれからずっと狙われ続けるというのは御免蒙りたいところだ。正直、そんな奴らとこの先戦い抜いていかなければならないと思うと不安になる。

『ヘッ！ そんな奴ら片っ端から返り討ちにしてやらア！』

と、そんな不安を全て鼻で笑って吹っ飛ばしてくれたウォーロックの言葉に、スバルは自然と笑顔になっていた。

とある路地裏

暗い路地裏を白髪の少年が歩いていった。

肌は褐色の少年は耳には金の台形のようなイヤリングをしており、服にはある紋章が記されている。

「……………」

前から二人組の青年が歩いてきていた。

一人は背が高い、そしてもう一人は背が低い。そんな人相の悪い青年達が歩いてきている。

このままでは進めばぶつかってしまふ。だが、青年達も少年もどちらも道を譲ろうとはしない。普通ならば人相の悪い青年達に道譲るなり避けるなりするのだが、生憎少年にはそんな気はサラサラない。

そして少年と低い青年の肩がぶつかる。

「ッ、おいおまえ」

人相の悪い二人は少年の方に振りかえった。が、少年はそのまま無視して歩いていく。

それにカツとしたのか、背の低い青年の方が少年の肩をガシッと

掴みにかかる。

瞬間

「　　ッ!？」

ギロツと少年に横目で睨まれた。たったそれだけで一瞬体が硬直するような錯覚を覚えた。

その少年の目それは見たこともないほどの殺気だった。それだけで人を殺してしまいそうな、そんな眼をしていた。

「ア……テメエ　　!!」

一度声が漏れたが、直ぐに気持ちを持ち直し二人の青年は殴りに掛かる。

ビビらせたお返しだとしても言いたげに。一発かまさないと許してやらないとでも言いたげに。

ドガッ、バキッ、ドゴッ!

そして三発。

鈍い音が響きわたった路地裏には一二人の青年が《　　・　　・　　・　　・　　》倒れていた。

「フン………」

二人の青年を一度見た。その時の目は害虫でも見るかのような目をしていた。彼にとって、二人の青年とは所詮そのようなものしか見えていないのだ。今の行動に関しても、襲いかかってきた害虫

をただ処理した。それだけだった。
それから少年は直ぐにその場から立ち去った。

コダマタウン ライブ会場

ここはコダマタウンのライブ会場。とは言っても屋内で行うために使う会場の方ではなく、野外で使われる会場の方だ。野外の方のライブ会場であるにも関わらず、ちゃんと照明器具もその他ライブに必要なものは全て揃っていた。

だが、ここには誰もいない。今日は誰かのライブがあるわけでもないからだ。

強いて言うならば、ステージにお尻を着いて座っている響ミソラと星河スバルがいた。

スバルはアマケンを後にした後、ミソラに呼ばれてここまで来ていた。昨日電話でスバルが話す筈だった事を聞くためだ。

「オーパーツ探し？」

顔を近づけて訊き返すミソラ。間髪をいれずにスバルは、うん、と返す。

スバルは九月一日ミソラと家で別れた後の事について話しをしていた。デンサン大学に行き、ブライと戦い、オリヒメという科学者にオーパーツ探しを頼まれたこと。そしてオーパーツ探しを承諾しようか迷っているということ。

「なんかおもしろそうだね、オーパーツ探し！」

「でも受けようか迷ってるんだ」

「じゃあ、一緒にやる？ 私も協力するから！」

そこまで言うともミソラは、今までの元気とは逆にため息をついて一呼吸おく。

「最近なんだか退屈なんだよね。FM星人との戦いも終わってハーブとも電波変換しなくなっちゃったし……」

それは平和になっていいことじゃないか、とツツコめずにいるスバルはただ苦笑いを浮かべている。

ミソラは、それに、と続ける。

「それって、世界中を冒険して回るってことでしょ？ 歌のヒントになるかも！ ね、いいでしょ、ハーブ？」

と、今度は自分が持っているギターの中にある電波体、ハーブに尋ねた。

実はミソラ。愛用のギターがぶっ壊されてしまったため、一度ハーブをギターの端末からスターキヤリアーに移していたのだが、ギターを天地に修理してもらい直ぐにハーブをギターの端末に戻した

のだ。ミソラ曰く、ハーブと会話する度に一々腰のホルスターからスターキヤリアーを取り出ししているのでは面倒くさい、らしい。

『ミソラがしたいと言つのなら私は協力するだけよ』

微笑んでそう答えるハーブ。どっかのガサツな誰かさんとはえらい違いだと、スバルは思う。

『なんだよ?』

「……別に」

『チツ』

感のいいウオーロックだ。そんな中隣では、ありがとう!、とミソラが喜んでハーブにお礼を言っている。

『ミソラっちが協力するならオイラも協力するブク』

後ろからカニの声が聞こえた。二人して振り返ると、ステージ中央にスーツを来てカツコイイ帽子をかぶって格好付けているキャンサー・バブルが立っていた。しかも、スポットライトまで浴びている。

『付き人として当然だブク』

やや低めで言い放ったキャンサー・バブルにミソラはやや苦笑いでありがとう、と返した。

『それにしても地球にも私達みたいな電波体があって、地球人と電波

変換していたなんてねえ』

本題に戻すかのように話しを進めるハープ。

瞬間

『何ッ!?!』

『ブク?』

『ミソラ! 何か来るわよ!』

三体の電波体は何かを感じ取ったのか、一斉に同じ方向に顔を向いた。

その方向の100メートル程先の場所には何かがいた。否、正確には何かが歩いてきていた。

あれは スバル達と背が変わらないくらいの少年だった。

だが、彼はゆっくりとこちらに近づいてきている。

不審者か何かと思ったのか、キャンサー・バブルはステージを降りてミソラの盾になるかのように前に立つ。

少年はゆっくりと近づいてきている。そして瞬間。腰のあたりから箱型の何かを取り出した。

あれは スターキャリアーに似ている。しかし、普通の物とは少し形が違っていた。

その異様なスターキャリアーを手にした少年はそれを天に掲げた。

「あれは ……!」

あの構えは

「……電波変換」

突如、少年の体を紫色の光に包まれる。

あの構えは 電波変換だった。特定の人間にしか使えないその力を何故彼が使えるのか、そんなことを考えていると何故か嫌な嫌な汗が流れた。

そして、少年の包んだ紫の光の前方になにかの紋章が浮かび上がっていた。

スバルはあの紋章をどこかで見た事がある気がしていた。

瞬間、光は晴れて電波人間が現れた。胸に先程の紋章を刻んでいる黒い少年が。

そして分かった。あの少年は

「ブライー！」

あの紋章は昨日戦闘で見た時の紋章だった。スバル達は直ぐ様ステージから飛び降りた。

『バカな！』

『そんな、地球人が！？ ありえない！』

ウォーロックとハーブが驚愕していた理由が自分にはわからない。

『あいつ、電波体の力を借りずに、単独で電波変換しやがった！』

「何だって！？」

普通ならばハーブの言う通りありえなかった。

ただの地球人にはそんな変身する力などないからである。電波変換をするにも、ウォーロックのような電波体の力が必要だ。それなのにあの少年はやってのけた。普通ならありえない電波変換を。

『そうか……あの時奴から感じた違和感はこれだったのか。奴からは電波体の気配が感じねえんだ!』

昨日の戦いの時に感じた違和感の答えがやっとわかった。しかし、電波体がない彼はどうやって電波変換したのだろうか。

そんな事を考えていると、ブライは右手に紫色の光を集め始める。

「ハア…… ブライナツクル!!」

そしてスバル達に勢いよく拳を突き出し、無数の拳の形をした衝撃は繰り出された。

轟音が鳴り響き、ステージのあちこちから黒煙が立ち上がる。あまりの黒煙にスバル達の姿が見えないほどだ。直後。電波変換という言葉が聞こえ、黒煙の中から青とピンクの光が飛び出した。

青の光はスバルとウォーロックが電波変換した姿ロックマン。そしてピンクがミソラとハーブが電波変換した姿ハーブ・ノートだ。ついでにいうと、キャンサー・バブルは黒煙の中でゴホゴホとせき込んでいる。

ロックマンとハーブ・ノートは上空のウェーブロードに着地する。直後に黒煙が晴れ、出遅れてせき込んでいたキャンサー・バブルが合流してハーブ・ノートの前に立つ。彼女の付き人として守るのは当然だ、とでも言いたげに。

上空を見上げた黒紫の少年、ブライは先程と同じ紫の光を溜めこむ構えをとる。

「ブライナツクル!!」

上空のロックマン達目がけて拳を前に突き出す。

先程と同じく、その光から発せられた無数の拳が他の衝撃がロックマン達を狙う。直ぐ様にロックマンはバリアを張り、ハープ・ノートを守る体制に入る。が、ミソラの前に立っていたキャンサー・バブルはあるうことか、ギリギリバリアの範囲外になってしまいバリアが守ってくれなかった。無数にある拳の中の一つが体に直撃し、そのまま空の彼方まで吹っ飛ばされて行った。最後にアレエえええええええ、という言葉を残して、彼は星になった。

そんなことはどうでもよい。

バリアで攻撃の嵐を乗り切った直後に、ロックマンは右、ハープ・ノートは左に飛びあがる。

「バトルカード！ リュウエンザン！」

リュウエンザンをプレーションしたロックマンはそれを一太刀振るい、炎の衝撃波をブライに放つ。

だが、その衝撃はブライには届かない。

ブライが昨日の戦いと同じく、左手から切っ先のない石のような剣を取り出す。それを右手に持ち居合の構えをとる。炎の衝撃波が直撃する寸前に剣を振るい、衝撃波をかき消した。

「パルスソングー！」

左に飛んでいたハープ・ノートがハート型の衝撃波を、ブライが炎の衝撃波を居合でかき消した瞬間に放った。居合とは剣を振るった直後に隙ができる。不意打ち気味ではあるが、その隙ができる一瞬を狙ったのだ。

が、それもブライに直撃することはなかった。居合で剣を振るった時の遠心力を利用し、そのままぐるりと一回転しパルスソングを

両断したのだ。

「そんな……！」

驚愕するスバル。ハーブ・ノートがパルスソングを放つ瞬間は誰にも予測できなかったはずだ。彼女だって、たまたまみつけた隙に攻撃を発動したのだ。それをブライが読んでいたなんて彼は普通ではない。故に普通の攻撃は彼には通じない。

「フーン！」

また同じく居合の構えをとる、が。今度はロックマン目掛けて、足のバネを使い力強く飛び上がった。一直線にロックマン目掛けてジャンプしたブライはロックマンの目の前で着地し、構えていた居合を抜いた。

「ッ
ッ！」

狙いは頭。とっさにロックマンはプレデーションさせていたリュウエンザンを盾にする。ガキンツという音が発し、火花が散る。盾にしていた剣をそのまま振るい、ブライの剣を弾く。

「でやア……！」

先程ブライがみせた居合の時の遠心力をマネして回転し、そのままブライに一閃する。普通に刀を振るうよりはずっと重い威力になっているはずだった。もう一度ガキンツという音が響く。

ブライは剣に左手を添え、ロックマンの攻撃難なく防いでいた。瞬間、ロックマンの土手っばらに重い一撃が炸裂する。

「ガホッ」

肺の空気が吐き出される。見れば、ブライの膝蹴りが腹に食い込んでいた。

体制を立て直すために一旦後ろに下がり距離を取るロックマン。肺が酸素を求めるために荒い息をする。

『スバル大丈夫か？』

「うん、なんとか」

体制を立て直し、直後にウォーロックアタックを利用し、一瞬でブライの懐に踏み込んだ。もう一度横に一闪。ブライはそれに負けじと縦に叩き落とすように剣を下ろす。

ガギイン、という音が響き、激しいつばぜり合いになる。両者ともに神経を自分の刀（剣）に集中させる。

刹那、ブライの体がぐらり右に揺らいだ。

「ガハッ!?」

あばらに痛みが走るブライ。横に体を曲げ、そのままウェーブロードの外へと吹き飛ばされる。

地面に向かって落ちていくブライ。直ぐさまロックマンは次のバトルカードをプレデーションさせた。

「バトルカード！ レーダーミサイル！」

ロックマンの周りに数機のミサイルが出現する。レーダーでブライをロックオンした直後にミサイルは発射する。ミサイルはみるみ

るブライとの間を詰めていき、あと数センチでミサイルが直撃するはずだった。

ヒュン、と全てのミサイルがブライの体をすり抜けていき、地面へと墜落していく。

「なんだって!?!」

何故ミサイルが体をすり抜けたのか、一瞬では把握できなかった。だが直ぐに理解する。彼は周波数を変えたのだ。

スタツ、と上空から落下したブライはなんとか着地することができた。そして、先程自分を攻撃した犯人を突き止めた。

「……あの女か」

ブライの目はハーブ・ノートをとらえていた。先程ブライに一撃与えていたのはハーブ・ノートの『シヨックノート フォルテッシュモ』だった。普通の『シヨックノート』よりは強力な威力を秘めた音符がブライに直撃し、横に飛ばされたのだ。

ギリツと奥歯を強く噛みしめた。先程の攻撃を数倍増して返してやるうかと考えた。

だが、ブライはそうしなかった。代わりに

「ティシャ! その女はお前に任せる」

そう、誰かに向けて言い放った。

第9話 ベルセルクの剣（後書き）

え？ 展開早い？

き、気のせいさ！

とりあえず、3話目は午後11時程に更新いたします。今日中には上げる……と思います。

第10話 エレメント・フォーチュン(前書き)

予告していた三話目更新……どうしてこうなった

第10話 エレメント・フォーチュン

「ティシャ！ その女はお前に任せる」

ハープ・ノートの方に視線を向けたまま、ブライはそう言い放った。

「ティ、シャ……？」

ロックマンとハープ・ノートは声を自然と声を揃えて呟っていた。そんな者、こんな場所にはいない筈だ。何せ、今日のライブ会場には誰もいないのだから、ロックマン達とブライしか今はいない……筈だ。

「あら、いいのね？ 余計なことするなど言っていたのはあなたの方だったけど？」

「『『ツ！？』『』『』」

不意に声が響いた。何処からか響いてきたのかは分からなかった。しかし、確かに透き通るかのような少女の音が、脳に直接響くように確かに聞こえていた。

「フン……」

ブライは返事を返さなかったが、その瞬間、視線をロックマンの方に向けた。

ロックマンは嫌な予感がしていた。ブライの仲間という言葉が脳裏をよぎる。確か、昨日もこんな風に声が響いたことがあった。確か、それは……ブライを連れていった時のあの天使の声だった。

嫌な汗がふきだした。直ぐに視界をブライからハープ・ノートに移動させる。ブライがこちらの方を向いているなんて、どうでもいい。だが、一度だけ確認したいことがあった。

「ッ!!」

いた。

ミソラの背後に黄色い姿をしたそれはいた。姿から天使を連想させる悪魔は確かにそこにいた。いつの間に、何処からやってきたのかなんてわからない。気配なんて感じとれなかった。故に、未だにハープ・ノートは敵が後ろにいることに気が付いていなかった。

だが、それで気付いたことがある。先程まで、ブライはハープ・ノートに視線を向けているものだと思っていた。でも、それは間違っていた。彼が見ていたのは、その後ろに姿を現していた天使の方だった。

「ミソラちゃんッ!!」

とっさに叫んだ。

天使を見れば、右手に持っている白い大鎌の柄をハープ・ノートに向けて構えている。

直後、ロックマンの声に反応したのか、ハープ・ノートはこちらを向いた。だが、それではまったく意味がない。後ろに敵がいることに気づいていないのだから。

天使の持っている大鎌の刃と柄の接続部に付いている宝石が、キラリと七色に光る。

「ちよつとの間、眠っておきなさい」

その直後、鎌を振るった。

柄の部分がハーブ・ノートの体をとらえる。そして、地上に向かつてもの凄い勢いでふき飛ばされる。

振っただけにしては落下の速さが普通ではなかった。

「キヤアあああああああああああ！！」

絶叫。それと直後に地面に思いっきり叩きつけられた。

重たく鈍い音が空間を支配する。落下した場所には半径五メートル程クレーターができている。

瞬間、ハーブ・ノートの電波変換は解けてしまい、代わりにクレーターの中心でミソラが倒れている。

『ミソラ！！』

ギターのエンドからハーブの声が聞こえる。何度も何度も。

さっきの一撃でミソラは気を失っていた。

並みの人間ならあれだけで即死であろう、威力。電波変換をしていたとはいえ、気を失っているだけでは済んでいないかもしれない。

『あのヤロウ……！』

左手のウォーロックが唸る。

「く……そ、オオオオオオオオオオ！！」

そして怒号。

それを発すると同時に、ロックマンは天使の元へ爆発的に駆け抜

ける。

もうロックマンの頭には天使に攻撃する事で頭が一杯だった。怒りや憎しみで感情が抑えきれないでいた。何だこの感覚。力がみなぎってくる。そんな感じがした。

数瞬で天使に懐へとたどり着いた。天使の胸に向けてロックバスターを構える。そして、放つ。

だが、それは当たらなかった。何故ならば、天使の前にはバリアの様な光の薄い壁が張ってあったからだ。

「ホーリーシルト」

放つ一瞬前にそう呟いていた。

ロックバスターのエネルギー弾はスウと消滅する。

天使が呟いて発生させたバリアは、どこか普通のバリアとは違っていた。

発動させた瞬間、砂よりも小さい粒子の様な何かが天使の前に集まり、それからバリアの様な形状に変化していた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

だが、ロックマンの攻撃はそれだけでは終わらなかった。瞬時にバトルカードをプレーションさせる。

シルドも貫く。『ブレイクサーベル』。

ガキンツッ！！

左腕にプレーションさせたブレイクサーベルがバリアを破壊する。そしてそのまま勢いよく振るい、天使を貫く、

キィィィィンツッ！

筈だった。

天使に白い大鎌の柄にブレイクサーベルが受け止められたのだ。両者の間に火花が飛び散る。

つばぜり合い状態になり、どちらも揺るがない。

「この程度なのかしら？」

余裕の笑みを浮かべつつ天使はポツリと呟く。

「なにをッ！」

カツとなり力を込めて押しはじめる。鉄と鉄がこすり合うような嫌な音が響くが、今のロックマンにはそんな事は関係なかった。

「そついうことじゃないわ」

「ッ？」

何を言っている、とロックマンは思った。

そして、怒りを爆発させるような言葉が天使の口から発せられる。

「あの程度のことと感情が揺らぐような弱い人間なのかと聞いているのよ」

「……！」

あの程度だと？ ふざけるな、と声にならない声で言い放とうと

したロックマン。

怒りが込み上げてくる。こんな奴を何発もぶん殴りたいようなそんな気持ちがかみ上げてくる。

だが

ゴスッ！

そんな気持ちの中、ロックマンの脇腹に重い一撃が放たれていた。

「ぐはッ!？」

肺から空気が吐き出され、つばぜり合いに負け後ろへ吹き飛ばされる。

数メートル先のウェーブロードに背中から着地し、さらに空気が吐き出される。

今のはあの天使から放たれた攻撃ではない。

だが、ロックマンは一つだけ大切な事を忘れていた。

敵は天使だけじゃない。

「ブラ、イ……!」

上体をゆっくりと起こしながら、先程攻撃した主の名前を言う。

そう、先程のあれはブライの蹴りが後ろから脇腹目掛けて放たれたものだった。

ロックマンは気付いていなかったのだ。先程からブライがロックマンの背後に近寄っていることに。

「テイシャ、ロックマンには手を出すなと言ったはずだ」

するとブライが天使の隣に立ち、横目で睨みながら言い放った。

『テイシャ』？ さっきもブライが呼んでいたが、彼女の事だろ
うか？

「あなたの目は節穴なのかしら？ 私は手を出した覚えはないわ。
あの子が攻撃してきたから自己防御をしたにすぎない。なんなら、
私が手を出したという証拠があるのかしら？」

「……フン」

「ほら、言い返せない。それと、この姿の時はエレメント・フォー
チュンと呼んでくれないかしら」

『エレメント・フォーチュン』。それが天使あれの名前なのか、と考
えるロックマン。ならば、さっきの『テイシャ』とは彼女の本名な
のかと結論づける。

そこまで考えてロックマンは脇腹を抑えて立ちあがる。

このままでは勝てる気がしない。

二人の話を聞いていたところ、ここからはブライしか攻撃して
こない、と思う。だが、だからと言って、エレメント・フォーチュ
ンが攻撃してこないとも限らない。

二対一ならば確実に不利だ。

一人を相手にするのでさえ押され気味であるのに、二人を相手に
するならば確実に負ける。

そんな不安が脳裏をよぎった時。何かロックマンの顔をかすめ
た。

シュッ

カードが一枚ロックマンとブライ達の間、ウェーブロードに突き刺さった。

顔をかすめたのはこれが、とロックマンは直ぐに理解する。すると、

『ッ!? 新手か!?!』

急に、ウォーロックが何かを感じ取り言葉を発した。

「……チッ」

と、目の前のブライがロックマンの方を見て舌打ちをした。

「あなた」

今度はエレメント・フォーチュンが続ける、が。その言葉の続きはロックマンには予想できなかった言葉だった。

「だれ?」

「えっ」

その時エレメント・フォーチュンが自分を見ていないことが分かった。否、正確には自分の後ろに視線が向いている。ブライも同じく、ロックマンの後ろに目を向けていた。先程からずっと。

「いやー、誰と言われましても」

と、後ろから聞き覚えのあるような高い声が聞こえて、

「正義の味方？」

そう続けた。

第10話 エレメント・フォーチュン（後書き）

第三話目更新……ですけど、内容がイミフですね、はい。

最後とか凄く無理やりですね。書いてた私も）。）。（になり
ました

そんなわけで今回の話をまとめると、エレメント・フォーチュン天使登場。ハープ・ノート
戦闘不能。二対一からの援軍的な（？）

まったく言っていないほど今回進んでませんよw
とりあえず、次話でこの戦いも終わる……はず

こんな変な描写の改善のために、どうか感想よろしくお願いします
（。）。）

……エレメント・フォーチュンってこんなキャラだっけ？

第11話 発動のベルセルク

「仮面……?」

少女の顔を仮面のようなもので右半分覆っており、左目にモノクルを付けているのがわかった。そして姿からして、ピエロ……のよ
うな手品師マジシャンみたいな姿をしていた。

「……あなた、だれ」

眉を寄せて天使が口を開いた。

ロックマンの後ろに立っていた仮面の手品師はゆっくりと前を歩き、ロックマンの盾になるかのように前に立つ。

「正義の味方? ……うん、弱気を助け悪を挫けてきな? そういうわけで」

仮面をつけた手品師はエレメント・フォーチュンに指をさす。

「二対一なんて卑怯極まりないデスNE」

仮面のせいで良くは見えなかったが笑っているようだった。そして手に持っていた短いスティックを伸ばし、ニメートル程の槍へと変形させた。一体どのようにさせたら、手におさまる程のスティックをニメートル程の槍に変形したのか分からない。まるで手品でも見ているかの様だった。

槍を構える。それは仮面の手品師の戦闘態勢を意味している。

「……? 何だ、コイツ……」

「どつしたの、ウォーロック？」

『……いや、なんでもねえ』

ウォーロックが手品師を見て何かに気付いたようだが、それはこの戦いが終わってから聞くことにする。

まだ先程のダメージが残っていて立ち上がれない。片膝についているだけで精いっぱいだった。

余裕がない。

だが、手品師は余裕めいているように笑っていた。まるでワクワクしているかのよう。

それを見てかどうかはわからないが、エレメント・フォーチュンが嘲笑する。

「フッフ。もしかして、私達と戦おうとでもいうの？ 命知らずとはこのことを言うのかしらね。自分がバカげた行いをしていることに気づいていないと」

「ハツハツハ！ あんた等の様に二対一で弱い者いじめをするバカげた連中なんかよりはずっとマシだと思っくんデスけどNE？ 常識的に考^くえて」

目の前の手品師はやはり笑っている。悪役の癖にそんな事言うなんて、片腹痛いとも言っよう。

「あなたは……」

そんな手品師に何故助けしてくれるのかを尋ねようとしたが、手品師がそれを遮る。

「とりあえず話しは後だZ E。ちよろつと君に用があるからN E」
こつちを向いて片目ウィンク。ちよつとドキツとするスバルだが、それよりも、何故あんなにも余裕めいているのか気になってしまう。手品師は敵に視線を向ける。

先程の仮面の手品師の余裕めいた笑いに、エレメント・フォーチユンは完全にキレていた。今まで見せていた相手を見下すような笑みが消えて無表情だった。

怒りを表す様な表情よりも感情を現さない無表情の方が怖いとロツクマンは思う。なにせ、怒っているときと違い、冷静で、何をしてくるかわかったものではないからだ。

「……いいわ。ブライ、この子は貰っていくわよ」

そう言ってブライに確認をとる。

「好きにしる。ロツクマン以外のザコに興味はない」

そう言って右手に紫色の電波を収束させ始める。

エレメント・フォーチユンは確認をとると、仮面の手品師に大鎌を向け、一振り。同時に鎌から刃のような衝撃波が発生し、手品師を襲つ。

手品師は直ぐに、二メートル程の槍で薙ぎ払い、衝撃波を粉碎する。

「こつちへいらつしやい」

エレメント・フォーチユンはウェーブロードを転々と移動する。

上等、と言い、手品師もその後を追っていく。

残るはロックマンとブライの二人だけ。邪魔者は居なくなつたことを確認し、ブライは拳を腰に据える。

「行くぞ！ ブライナツクル」

「くッ！」

先程から溜められていた拳を突き出し、ブライの拳から無数の拳に似た衝撃波が放たれる。

膝をついていたロックマンはこの攻撃に反応することはできても、避けることはできない。コンマ一秒遅いのだ。それならば、とバトルカードを転送させる。
プレーション

「バトルカード！ スーパーバリア！」

出現した黄緑色のバリアはブライの攻撃を防ぐ防御力を誇っていた。無論、バリアには亀裂などどこにも入っていない。

ブライナツクルがバリアに激突したことにより爆発し、それによってブライとロックマンの間に黒煙の幕が生じる。それは二人の間を遮る壁のようになり、そのせいでお互いが見えなくなってしまう。

『来るぞ！ スバル！』

ロックマンより先に気配に気づいたウォーロックが言う。それとほぼ同時に煙の中を駆け抜けてくるブライの姿が見えた。

瞬間、切っ先のない石のような剣がバリア目掛けて振り下ろされた。

バキッと亀裂が入り、ほんの一瞬で碎かれる。バリアの残骸はあたりに散らばり電波に溶けるように消えていく。

「バトルカード！ ブレイクサーベル！ うおおおおおー！！」

バリアも軽々しく砕く剣は並大抵の剣では太刀打ちできそうもない。そのため剣の中では威力の高いブレイクサーベルを選択する。しかもこれは文字通りどんなに硬いもの壊すものだ。ブレイクする うまくいけば、あの厄介な石の剣も砕く事が出来るかもしれない。

ロックマンはブライの懐に飛び込み、ブレイクサーベルを振るう。当然のようにブライの剣に防がれる。

ガキンツという甲高い音がすると同時に、二人は後ろへバックステップをする。

「スバル、奴の方がスピードは上だ。今のままじゃ近距離戦は不利だ。遠距離から攻撃して奴の動きを封じろ！」

「わかった。バトルカード！ ガトリング！ マヒプラス！」

ウォーロックの指示に従い、着弾の速い弾に動きを封じるマヒ効果を付けたガトリングを右手を変え、ブライに放つ。

何百という弾が一気にブライ目掛けて放たれる。一発でも当たれば、それだけで相手は動けなくなる。

勿論、そんな弾を全て避けることなど、ブライであっても難である。

だが 爪が甘いと不敵に笑う。

「フン」

ヒュンツと両足以外の周波数を変える。そのせいでマヒ効果のある弾は全て、周波数が変わったブライ体をすり抜けていく。

何故足の周波数だけは変えなかったかというと、足も変えてしまつてはウェーブロードとの周波数が合わなくなつてしまい、落下し

てしまうため。先日の戦いの時といい、なんとも器用な奴である。
全ての弾をかわし、足以外の周波数を戻そうとする瞬間

「今だ！ バトルカード！ フリーズナックル！！」

と、ガトリングからフリーズナックルへ右手を変形させると、ウ
ェーブロードを渾身の力を込めて叩きつける。

すると、瞬間的にフリーズナックルによって発せられた冷氣によ
りウェーブロードが凍結する。勿論、ブライの足ごとだ。足の周波
数を変換していなかったことが仇となった。

タイミング悪く周波数が戻したブライは舌打ちをする。何せ、も
う既にロックマンがブレイクサーベルを構えて駆けていたからだ。

今からでは、他の周波数を換えようとしても間に合わない。今の周
波数から他の周波数に変換するには、周波数を色々と調整するため、
コンマ何秒かのタイムラグがあるからだ。

足を使って、全速力で避けたいところだが、生憎、足が凍って動
かない。

「ハアアアアアア！！」

既にブライの懐に飛び込んでいたロックマンはブレイクサーベル
を振るっていた。

ブライは反射的剣を盾にした。今まで以上に甲高い大きな耳触り
な音を立てて、攻撃を防ぎきっていた。

ロックマンは甘く見ていた。あの石の剣の硬さは異常だ。この世
のものとは思えない程硬かった。

全力で攻撃したロックマンにとって、今の攻撃は今までで最高の
威力を発していた。だが、ブライの石の剣はブレイクサーベルでも
砕けない。それどころか傷一つはいつていないようだった。

「クツ……!!」

ブライは左手で石の剣を持っている右手を抑える。防いだ時の反動が遅れてやってきたのだ。やはり、片手で防ぐのは結構無理があった。反動でしびれてしまい、少しの間動かせない。

しかし、ロックマンの方も同じなようだ。先程までブレイクサーベルに変形させていた左腕を抑えている。

ブライはこの隙を狙って、体全体の周波数を変換する。今度は足も変換させる。

足が氷をすり抜き、体が重力により、体ごとウェーブロードをすり抜け、地面へと落下していく。

ガキンツ!!

それは天使の鎌と魔術師の槍がぶつかった音だった。

両者、つばぜり合いになった直後、武器に力を入れ相手を弾く。反動でザザアと後ろに返される。

「あなた、さっきの子よりはやるみたいね。一応名でも聞いておくかしら」

不敵な笑みを浮かべながら天使は聞いた。

「え、名前？ ピエロ、こん時の名前ってなんぞ？」

と自分の持っている槍、正確には槍の姿になっているピエロに尋ねる。今まで自分たちの変身している姿の名を知らなかったのか、なんともものんきである。

『えっと……うん、ピエロ・マジシャンズでいいんじゃない？』

「おお、ピエロ道化師でありマジシャン手品師ってことか！ イイネ！ 流石だぞ
E、ピエロ」

その上適當である。

ピエロに向けて親指を立ててグッドというサインを送る手品師。

ピエロはピエロで当然だねと言いたげに誇らしげな感じである。

「というわけで、ピエロ・マジシャンズってことでヨロシク！」

「……そう」

エレメント・フォーチュンはどっと疲れていた。なんだ、この緊張感のない連中は。

「まあ、いいわ。そう、ピエロ道化師とマジシャンズ手品師。もつとも、さつきから行っているあなたの攻撃はマジカ魔術というよりイカサマ詐欺のように騙すような手口ものだったわ。手品師は人を楽しませるもの。もつと私を楽しませてくれないかしら」

「カッチーン！ オイオイ、あんなのが実力だとも思ってたのかね
チミは？ まだまだこれからだZE！」

チミとは誰だとツッコミたくなるエレメント・フォーチュンであったが、そんなことはどうでもいい。

今まで笑顔だったピエロ・マジシャンズの顔から笑顔は消えてムスツとしていた。逆にエレメント・フォーチュンは不敵な笑みが増していた。そして、相手を見下したような瞳を向けていた。

「なら、見せてくれるかしら。あなたの実力！」

その言葉を合図に、天使と魔術師は踏み込んだ。直ぐ様、鎌と槍がぶつかり合い甲高い音が響く。

先程と同じくつばぜり合いになる。だが、これではラチがあかない。

ピエロ・マジシャンズが仕掛ける。

「カードスラッシャー！」

つばぜり合いの最中、隙を見て電波で作ったランプのカードを相手に投げる。

しかし、軽々しくエレメント・フォーチュンはひらりとかわす。

「ハンドルからの操り!!！」

先日見せた技を放つ。つばぜり合い状態の中で指を軽く動かし、エレメント・フォーチュンを背後から狙う。だが、彼女には攻撃が通らない。

「ッ!？」

背後に光のバリアのようなものが張られていることがピエロ・マジシャンズの位置から見ても分かる。さっきと同じだ

「ホーリーシルト」

先程ロックマンのロックバスターも防いだのもこの技だ。
トランプのカードは光の壁の様なものに触れ、スウツと消滅して
いく。

「ほら、性懲りもなくさつきと同じ戦い方をする。あなた、バカな
のかしら？」

そう先程、同じ攻撃をした。そして先程と同じく防がれた。
不意打ち気味たこの攻撃は何の意味もなさない。それはピエロ・
マジシャンズだって分かっている。

だが、狙いは彼女の狙いはそれではない。

「……………」

ピエロ・マジシャンズの言葉に何も言い返さない。
だが、攻撃が通らなくて絶望しているのではない。それどころか
ピエロ・マジシャンズは余裕の笑みを浮かべていた。

「……………何がそんなにおかしいの？ まさか何かトラップ ……!?」

そう言っって危険を感じたエレメント・フォーチュンはつばぜり合
いを中断し、バックステップする。

このように敵が笑っていれば、誰もがエレメント・フォーチュン
のように何か攻撃をしかけてくると思ひ、警戒するだろう。だが。

「ポーカーフェイス」

「な……」

そう、ピエロ・マジシャンズ的笑みはポーカーフェイスのようなものだった。

普通、ポーカーフェイスとは相手に有利、不利などのことを読みとらせないため、感情を出さない表情を無表情にしていることを指す。

だが、ピエロ・マジシャンズにとってこの場合、無表情ではないもののポーカーフェイスを示していた。何せその役目通り、相手が有利なのか不利なのか判断出来なくし、騙すことが出来ていたのだから。

実は現れた時から笑っていたのはこの為だった。

相手の判断を狂わすための作戦。

だから、彼女はいつも笑っている。

「……見事に騙されたわ。滑稽ね」

「なんデス？ 自虐ネタデスか？ オイオイ、そこまで大サービスしなくてもいいですよ、ハイ」

「……心底バカにされている気分だわ……。いいわ。あなたを本気で潰してあげる」

エレメント・フォーチュンは武器である大鎌を片手で持ち、もう片方の手で、鎌の柄と刃の接触部分についている宝石の様なものに触れる。

すると、宝石が七色の眩い光を辺りに発した。

「くッ！」

ピエロ・マジシャンズは顔を手で覆う。
眩しくて、眩しすぎて、光の中では何が起きているのか分からない。

「……フォー、いける？」

「ハイ。1万年前の記憶を参照すれば変形可能「コンバート」です、姫様」

「お願いできる？」

『仰せのままに』

声が聞こえたと思ったら、パアツと光は晴れた。ピエロ・マジシャンズは目を擦り視界を取り戻す。

エレメント・フォーチュンに何かをされたというわけではないようだ。

だが、相手のあるものが違っていた。

「……アレ？」

目をもう一度擦る。だが、やはり目を擦る前と変わりない。持っている武器が変化していた。否、変形したのだろうか。

さっきまで大鎌だった武器は突如と弓矢へと変形していた。色は大鎌と同じく白。そして弓の中心には鎌だった時と同じく、七色に光る宝石がはめ込まれていた。

「さあ、掛かってきなさい」

ステージ近くの芝生へと降り立つブライ。

「……………」

無言で何度か手を開閉する。どうやらしびれは直ぐにとれたようだ。

そうこうしていると、ロックマンもウェーブロードから降りてくる。腕を抑えていないことから、あちらもしびれはなくなっているようだ。

「くそ、もう少しだったのに！」

今さらそんな事を言ってもしょうがない。戦いとはそういうものだ。

互いに次の攻撃を繰り出す構えをとる。

「遊びはここまでだ、ロックマン！！」

瞬間、ブライは駆けた。

ウォーロックの言葉を思い出す。

接近戦では動きを止めない限り、ロックマンの方が圧倒的に不利だ。だからといって、先程の同じ手は通じない。

「それなら、バトルカード！ キャノン！」

まだ距離がある。遠距離からキャノンの乱れ撃ちで相手の動きを止めようと考える。

ロックマンは弾を連続で発射する。威力は低めでも、一発一発撃つたびの反動少ない。なので、直ぐに次の弾が撃てるのだ。

だが、ブライに弾は当たらない。

理由は二つある。一つはブライの駆けるスピードが速く、弾を撃つても直撃する前にかわすから。そして二つ目は、自分が持っている剣を振るい、弾を弾いているからだ。

ブライは駆ける速さを減速させずに剣を斜めに振るい、きれいに弾いているのだ。そんなことができるブライはかなりのバトルセンスと言えるだろう。

僅か数秒で距離を詰められる。

「くッ！」

最後にもう一発放とうとするが、間に合わない。既に懐に入られていた。

そして、

「ブライアーツ！ ハアアアア！！」

右拳で一撃。

ドゴッ！

二撃目にフック。

バゴッ！

三撃目アッパー。

ドカツ！

「か……ハ……」

肺で息を吸うのが辛い。呼吸が十分にできていないのだ。

重い三撃を喰らい、ロックマンは倒れそうになる。

今まで以上に強烈な三発だった。特に、三撃目のアッパーはドテツ腹にヒットされ、内臓がいくつか破裂したのではないかと錯覚してしまう。

「ハアアアアッ……！」

そして最後にサマーソルトキック。ロックマンの顎にクリーンヒット。

その結果、ロックマンはもの凄い勢いで後方のステージへと吹っ飛ばされる。その勢いはまるで戦車砲で発射された砲弾のようだった。

「うわあああああああ……！」

ステージに直撃する人間砲弾。ステージは轟音とともに崩壊し、崩れた瓦礫の山になる。

そのままブライは紫色の拳をアッパーの様に振るい空を切る。そして発生する紫色のグランドウェーブ。直進するグランドウェーブはロックマンをとらえ、のみ込む。

「ぐ、はッ………！……！」

今の一撃でまたも煙が生じる。

直ぐに晴れるとロックマンは仰向けに倒れていた。もう立てない、否、立つことができない。どうやら気絶しているようだった。フツと笑い。ブライはゆっくりとロックマンに歩み寄っていく。

『オ、オイ！ スバル！！』

「……………」

返事がない……やはり気を失っている。

『しっかりしろ、スバ ウグツ！』

ルと言い切る前に。ウォーロックの頭が圧迫された。既に歩み寄っていたブライの足に踏みつぶされているのだ。ブライはゆっくりと足に力を入れ、体重をかける。ウォーロックはゆっくりと地面にめり込んでいく。

『ウ、ガツ……アア』

みるみるうちに土の中へと埋まっていくウォーロック。こんなにも簡単に埋まっていくものなのだろうか。ウォーロックは手も足も出せない。

突然、踏みつぶされるような圧迫は止まった。だが、

ドカツ、ドカ、ドガツ！！

『ゲワツ、ウ、ゲハツ！』

攻撃は続いた。

今度は踏みつけられているのだ。

何度も何度も何度も何度も、踏みつける。まるで、子供がアリの面白がつてつぶすかのように、何度も。その残酷さから誰もが目を背けることだろう。ブライには情というものが無いのだろうか。

「終りだ」

踏みつけることを止め、切っ先のない石の剣をウォーロックの頭上に構える。

『クツ………』

ドクン

狙いを定めるように一度ゆっくり下ろす。

ドクンッ

そして一度引き上げ、

ドクンッ、ドクンッ

最後に一気に、

ドクンッ！ ドクンッ！！

下ろす！！

ドクンッッ！！

増え続けているのだ。

その無数の矢がピエロ・マジシャンズをとらえる。

「ッ!?　ちヨ、おま　!!」

瞬間、何本もの矢がピエロ・マジシャンズを貫いた。瞬時に矢を纏っていた炎がピエロ・マジシャンズの体を炎で包む。その間僅か一瞬だ。

ポウッと燃え、ものの数秒で灰に変えられた。

ピエロ・マジシャンズは、完全に、消滅した。

「……この程度だったとは、私の見る目が甘かったのかしら」

そう言つて、自分が消し炭に変えたピエロ・マジシャンズを見据えた。瞬間、

「　イヤー、ビックリしちゃったNE。まさか、いきなしあんな事してくるとは」

「ッ!?」

背後から、ピエロ・マジシャンズの声が聞こえた。

まさか……さっき焼きつくした筈なのに。

「ン、ああ。何が起きたかわかってない状態?　イヤー……簡単に説明すると、アンタがさっきから戦ってた奴、オレの身代りマリオネットデス」

「なん……ですって……!　いつから……」

そんな筈はない。そんな事を与える隙は与えなかったのだから。

ならばいつ？

「最初から今まで」

そう、最初からだった。

ロックマン達の前に登場したあの時から、ピエロ・マジシャンズは既に身代りマリオネットと入れ替わっていた。

身代りを作るのは簡単だ。自分の電波、周波数にちょっと細工を加えてコピーしてやれば自分ソックリの電波人間の出来上がり。しかも、操り主が考えた事を喋るといふなんとも不思議なものだ。

あとは自分の技、操りハンドルを使って操作する。

つまり、あのピエロ・マジシャンズはまだ本気ではなかった。

「……フ、フフフ。やってくれるじゃないの。そうね、そうよ！これくらいやってくれないと面白くないわ！」

しかし、本気でないのはエレメント・フォーチュンだって一緒にある。

お互い、本気の無理をして本気で戦っていなかったのだ。

「フッフーン。さっきのオレと今のオレが同じだとは思っなよ？」

『主……それ、どこぞの悪役だよ？』

「んなチツセー事はどうだってもいいんだよ。これを言うだけでデフォで五三万もの戦闘力を得られんだからよ」

そんなとんでも設定など、この世にない。

そこで会話は終わる。

二人は互いに構える。エレメント・フォーチュンは弓矢を。ピエ

ロ・マジシャンズはステーキを。

一気に空気が張り詰める。ここが一番の正念場だろう。攻撃を先に繰り出したのはエレメント・フォーチュンだった。

「フレイムアロー！」

先程と同じく炎を纏う矢を無数に放つ。

対して、ピエロ・マジシャンズは被っているシルクハットをとり、それを前に構える。

「リバースハット」

自分に向かってくる炎の矢を華麗な動きでシルクハットの中に入れていく。否、まるで、シルクハットの中に吸い込まれていくようにも見えた。

「ふう、大量大量」

全て回収し終えたシルクハットを持ったまま、体をくるり一回転して、相手に投げる。

瞬間、先程回収されたはずの炎の矢がシルクハットから飛び出した。

狙いはエレメント・フォーチュン。

放ち終えたシルクハットはピエロ・マジシャンズの手元に戻ってくる。

「甘いわね。ミラーアクア」

透き通る程透明の水で壁を作る。その水壁は鏡のようにこの世界の光を反射し、この世界をそっくりそのまま映していた。

炎の矢は水壁によって炎が沈下するわけでもなく、その水壁の中へ入っていく。そのまま貫くかと思いきや、水壁から射出された。否、光が鏡に当たると反射するのと同じように、水壁によって反射されたのだ。

「ゲツ！ マジックハット！！」

必至に防御技を発動させる。ピエロ・マジシャンズのシルクハットが巨大化し、ピエロ・マジシャンズを覆う。つまり今、ピエロ・マジシャンズはシルクハットの中に入っている状態になっている。直後に炎の矢はシルクハットを貫通した。炎の矢を防ぎきれなかった、この防御技では。無数の矢が貫通していく。これでは中にいるピエロ・マジシャンズは無事では済まないだろう。

「……そこね！！」

エレメント・フォーチュンは後ろを向き、弓矢を盾にするように構えた。

ガキンツ！！

そこに、ピエロ・マジシャンズはいた。

丁度、エレメント・フォーチュンにスティックランスを振るっているところだった。

「よく気付いたNE！」

「敵の背後に回る癖、直した方がいいんじゃない？」

「シルクハットを二つ出現させて、その中を移動して攻撃を避けるまでは良かったと思うんだけどなあ」

ピエロ・マジシャンズのさっきの技は防御技ではない。回避技だ。元いた場所に一つとエレメント・フォーチュンの後ろに巨大化したシルクハットを出現させ、その中を移動したのだ。

この技があれば、脱出不可能な奇跡の大魔術なんてお手のものだろう。

ギリリとピエロ・マジシャンズのスティックランスがエレメント・フォーチュンの弓をゆっくりと押していく。ゆっくりと徐々に。

だが、押しではいるが、今力は勝ってはいるが、それでもエレメント・フォーチュンはまだ本気ではなかった。不敵に笑みを浮かべているところから、ピエロ・マジシャンズにもそれは分かる。何せ、先程ハープ・ノートを吹き飛ばしたあの威力はこんなものではなかった筈だから。

「そちらさんもそろそろ本気で来てもらえませんかNE?」

「フフ。そうね。アナタは本気で来ているのだから、それ相応の対処が必要よね……」

それならばと言いたげに、少しずつ押し返され始める。それもまだ余裕があるようにも見える。

「お、オイオイ。ちよろつと強すぎやアしませんかNEッ?」

「何を言っている。まだ本気ですら　ッ!??」

言葉の途中でエレメント・フォーチュンは身を引いた。それから直ぐにピエロ・マジシャンズなど眼中にないかのようにステージ近

くの方へ視線を向けた。

この時隙はあったが、どうやらそんな事は言っていられないようだ。

突如、光の柱のようなものが出現したのだから。

それは上空目掛けてそびえ立っていた。見えはしないが、もしかしたら大気圏を越えて宇宙まで届いているのかもしれない。

ピエロ・マジシャンズはその光の柱を見て、とても綺麗だと思った。

それから直ぐに光は縮小していき、一人の戦士を残しパアッと消えた。あの戦士はロツクマンだろうか。それにしても姿が違うような気がする。ここからでは遠くて良く分からない。

それを見てエレメント・フォーチュンは舌打ちをしたように見えた。若干だが、笑顔が怒りに変化したようにも見えた。今まで、この戦闘に限るが、あんな顔をしたことはなかった。

「……遊んでいる暇はないようね」

そう言って、ピエロ・マジシャンズの方へ向きなおる。そして両手をゆっくり前へ突き出す。

「オイ、そりゃアどういう」

「フレイムドラグーンッー!!」

ピエロ・マジシャンズの言葉を中断させ、両手から炎が発生された。そのままその炎は収束していき、巨大な龍に姿を変える。

大きさ約、人の三倍以上ありそうなその龍は、どこかアニメか何かに出てくるような姿をしている。

その見た目炎で出来た龍は、ピエロ・マジシャンズ目掛けて突っ込んでくる。

「うわッ！」

自分の三倍以上もある炎の龍をなんとかかわす。あんなもの当たればたまったもんじゃやない。即火だるま確定だろう。動きも速いし、ここはさっさと倒さないと厄介なことになる。

と、そこまで考えて、ピエロの声が聞こえた。

『主！ アイツがないよ！』

「何イツ？」

一瞬前までいたはずのエレメント・フォーチュンの姿は既に消えていた。

元居た場所はただ、空虚と化していた。

逃げた、とは言い難い。帰ったとも言い難い。

だとしたら、ブライの方へ加勢に行った確立が高い。

まずい。

加勢に行かせないよう、こっちに注意を向かせるためにわざと挑発して戦っていたのに、これでは何の意味もなさない。

速くロツクマンの方へ向かわないといけない。

だが、

「先にコッチだNE……アヤツ、置き土産のようにこんなヤツを残して行きおつて……」

炎の龍。

この場に技の発動者が居なくても技自体が発動中ということとは、こいつを倒さないとどの道お家へは帰してくれないらしい。

「メンドくさいデスNE……」

『しょうがないね。早く倒しちゃおつよ』

「……アイアイ」

生返事をしてゆっくりと戦闘態勢に入る。

上等。一瞬で片づける。

光が晴れると、そこには銀色の戦士ロックマンが立っていた。

今までとは違い、全身を西洋の鎧のような物で身を固めている。その上、右手には今まで持っていなかった、銀色の石の剣を持っていた。石剣の中心から切っ先へかけては電波で出来ているようである。

これは確か　ベルセルクの剣

「チツ……」

ロックマンの姿を見て舌打ちをするブライ。直ぐに攻撃をしかける。

右拳に紫色の電波を収束させ、

「ブライバースト!!」

アッパーカットで空を裂き、紫のグラウンドウェーブを発生させる。先程放ったものよりも、威力を極限まで高めたブライバーストだ。直撃すればかなりのダメージを負う筈。

そんな威力を誇るブライバーストに向けて、石の剣を軽く振るう銀色の戦士。

そう、軽く。

軽く振るっただけで、極限まで威力を高めたブライバーストが吹き消された。代わりにと銀色の戦士はもう一度振るう。瞬間、稲妻が発生し、ブライ目掛けて駆け抜ける。

「ぐウツー!!」

石の剣を盾に稲妻を防ぐが威力が途轍もなかった。左手もそえていると言うのに、今にも手にしている石の剣が吹き飛んでしまいそうな威力だった。

軽く振るっただけで、この威力ではたまったものではない。

ずっと防いでいてもこのままじゃ力負けして後ろに吹き飛ばされてしまう。どうすればいいか試行錯誤を繰り返すが、どれもいい案が見つからない。

「ブライー!!」

そこへ、手品師と戦っていた筈のエレメント・フォーチュンが後ろに立っていた。

余裕はないが、横目で後ろを見る。

「一度退くわ。今の私達ではムーの遺産の力には敵わないわ!」

「だがッ、この気を逃すわけには　!!」

「大丈夫。まだチャンスはあるわ。……今は退くのよ」

「……チッ」

了承したと言うべく、ブライは前に向き直る。後ろには既に、エレメント・フォーチュンの姿はない。

タイミングを見計らい、周波数を調整し、周波数を変換するブライ。間一髪のところまで稲妻は避けられる。

もう、二人の姿はここにはなかった。

「逃げられたか」

ロックマンは呟いた。いつの間にか、意識が戻っていたようだ。それから、自分の姿を見る。

この姿は何？ そして、この力は？

疑問が生まれた。何せ、ブライ目掛けて放った稲妻が通った後は、クレーターが出来ていた。しかも、ただクレーターではない。何かの力で地面がえぐられた、そんな感じだ。

だが、あの二人を追い払ったようなので、ひとまずを安堵をつく。

「……そういえば、さっきの助けてくれた人は？」

「ヨオー」

噂をすればなんとやらだ。いつの間にかロックマンの後ろに立っていた。

ゆつくりと手品師は歩いてくる。

「あなたは誰ですか？」

「ん〜？ オレかア？ 通りすがりの仮面 以下略(ry)ア」

「は？」

訳のわからないことを言う女だった。

「ああ、この姿はピエロ・マジシャンズ。そっちは……ロックマン、
でいいのかなア、星河スバルくん？」

「ッ！！」

驚いた。

何故初めて会った筈のピエロ・マジシャンズがロックマンの本名、
星河スバルの名を知っているのか。今まで漏らしたことは……あま
り、ない筈だ。

「イヤ、んなことはどうでもいいんだ。キミに聞きたいことがある」

笑いながら、だが真剣な眼差しで聞いてくる。

「九月一日、キミは電波変換して、博物館に居たのかなア？」

答えは イエスだ。

「それなら」

「ッ！？」

ガキンッ！

「キミは敵ということだNE」

ピエロ・マジシャンズが持っていたスティックが一瞬で槍に変形し、振り下ろされた。

咄嗟に持っていたベルセルクの剣が 勝手に動いた気がした。

否、きつと条件反射で咄嗟に防いだけだろう。

しかし、どういうことだ。味方、さっき助けてくれた人が急に襲ってきくるなんて。

「うっ……くッ!」

何だ、この力は……。

重かった。たった一撃がとても、凄く。

この銀色の姿はよくわからないが、ブライを追い返したくらいだ。相当な力が秘められている筈なのに、あちらの方が力が上。

彼女は笑って、最後にこう言った。

「戦争をしましょう」

番外編 暑いけど雑談（キャラ説明＋補足説明）

おはこんばんは！ 今年も暑いですね。熱中症にはなってはいませ
んか？ 水分補給はしっかりしましょう！

はい、そうです。「直ぐに上げられる」とかなんとか言っておいて
既に一週間です。ハツハツハ……ごめんなさいorz

というわけで、今回最初のゲストのテイシャさんです！

「え……は、え……？ 何故このタイミングで？ というか、ここ
は何処……？」

いやだなー。毎度おなじみ新スタジオじゃないですか、お嬢さん。

「『新』なのに『おなじみ』……？ というか、スタジオって何で
す？ それとタイミングについて」

スタジオってというのは、映像とか音とかを収録する為に利用される
施設のことだよ。まあ、本来は芸術家の仕事場とかをさす場所のこ
となんだけど、ってそんなことはいいじゃないか！

「はあ……」

それじゃ、本題入るよー。

「（あれ、タイミングについては 無視？）」

ここで読者の皆さまに補足説明。テイシャと、テイシャが電波変換

した姿のエレメント・フォーチュンでは若干性格が違います。なので、雑談を読んでいる途中で「キャラ崩壊してるwww」とか思われるかもしれませんが、理由がありますので、順を追って説明させていただきます。

そんなわけで、今回のゲストはティシャになりました。初めて亜夢ちゃんのリストラです。

「それで、私が呼ばれた理由は」

上記文が読めないのか……今説明したばかりですけど、姫。

5分後

「なるほど、やっとわかりました。つまり、私の誕生日パーティー

」

だ・か・ら・ち・が・う・か・ら!! 大体、あなたの誕生日は今日じゃないでしょうが！（ミソラはこの前誕生日だったけど）

「……あ、そういわれてみればそうでした。一万年も眠っていたので忘れていました」

まったく、何度言わせれば分かりますの、お姉様！

「？ 私はあなたの義姉あねになった覚えはないのですが」

わ・かつ・て・ま・す・か・ら！！　というか、年齢11歳、身長144センチの姉なんてどこに　るんだよ。私より年が下じゃないか、まったたく。

「……………あ、では、やはり誕生日パ　」

……………もういいよ、それで。（キリがない……………）

話し進まないから本題に戻るよ……………とは言っても、何から話そうか。

……………ほむ、まあ、ティシヤについてキャラ説明をして、補足に入りますかね。

「私ですか……………？」

そうでございます。

「……………と言われても……………趣味も何もないし……………日の光を浴びているとウトウトするぐらいしか特徴が」

お前は猫か！

ティシヤ。

年齢はスバルと同じく11歳。身長144cm。

容姿は銀の髪に基本的ロングに蒼い瞳。そして、ソロと同じく褐色で古代服を着用。左の首筋にはムーの紋章があるが、普段は古代服の襟で見えない。

「自分の事が事細かに書かれるのって不愉快ですね……………」

まあ、気にしない気にしない。どっかの変態さんはこれで萌えるんだから（実際は知らないけど）。

「もえ……？ 燃えるんですか？ 大火傷しそうですね」

……次いっつ。

性格は基本のんびりとしていて、やや天然気味。だが、聡明かつ冷静である。電波変換すると、少し強気な性格にキャラチェンジ。普段敬語は使わない（年上以外は）

「電波変換したって、性格なんて変わりませんよ？」

……ハハハ、ソウダネ（調子に乗って書いてたら、本編では強気どころかDSにさせてしまったなんて絶対言えない……てか、自分で気づかないのか。あんな冷静でS気がある子で……悪魔のような）

「？ どうかしました？」

いや、何でも。そういうわけ補足……って説明するより電波変換をした方が早いかな。

よし、じゃあ電波変換宜しくね。

「わかりました。電波変換！」

ピカッ！

それではエレメント・フォーチュンさん、改めてこんにちは。

「……気安く喋り掛けなくてももらえるかしら？」

「……………（とまあ、こんな感じに変わるわけで。これで多重人格症状ではないのです。一種の興奮状態みたいなもの）」

エレメント・フォーチュン。

容姿は本編参照。

武器については、『フォーチュン』というムーの遺産がでんぱたい変形したものの。基本の武器は白い大鎌だが、ある条件を満たせば他の武器にも変形できる。コンバート（ネタバレ防止の為、フォーチュンについての説明は省きます）

「……………いや、あの、その大きな鎌で私の首を切り落とそうとするのはやめてもらえませんか？ さつきから刃が首に当たって

「退屈なのだから仕方がないわ。それでも、何？ 私を退屈から解き放ってくださいるのかしら？ ……フ、そうね、熱された鉄板の上で素足で踊ってくださいるのであれば、考えてあげてもいいわ。フフ」

「……………いや、もういいです。（ナニコレ、雑談じゃなくて拷問になっらない……………？）」

エレメント・フォーチュンの主な属性は無。だが、『エレメント』という何恥じぬよう、他の属性の技を発動することができる。

悪魔め……えい（ポチッ

「何を　　ッ!？」

危ない……危うく命を落とされるところだった……というわけで隙を見て記憶消去+強制退場。次行ってみよー!

というわけで二人目、はい!

「イヤッファー」

……イヤッファー　じゃなくて、挨拶をしなさい。

「オーケー　　そういうわけで、皆のアイドル」

違うでしょ!

「オットット、こりヤ失敬。コホン。　　コダマタウン出身、聖堂月奈。ただの人間には興味ありません。この中にうty」

ってコラー!!!　　誰が斬新ハクリのあしなな自己紹介をしろと言ったんだよ!

「えー、コレ一度言ってみたかったんデスから最後まで言わしてくださあ」

「くだしあつて……ダメなものはダメ！」

「ウム……仕方がない。普通にやりますかNE」

「そうそう。普通が一番。」

「スラムツパギー！」

「……もういいよ（くそ、面倒くさい……なんでさっきから私がツツ
コミに回ってるんだ……）」

「それで、何か御用でござんすか？」

「ん、ああ、そうそう。本編の補足をね……と思ったけど、月奈の場合には補足はいらないね。まあ、キャラ説明だけでもね。」

「えー、メンドクセエ。そのためにオレっち呼ばれたのかよ。何だよ、チクシヨ」

「まあまあ、そう言わない。それじゃあ行くよ。」

聖堂月奈。

コダマタウン出身、コダマ高校一年生。性格は常にテンションMAXの明るさ。時々（というか常に）腐女子発言をする。本人曰く、一歩手前。

容姿は何処にでもある高校指定服。髪の色は黒で、肩の高さ程度まである。

そついや、休みの日とか私服着ないの？

「ン？ あア、休みの日とかは殆ど外出ねエから着ねエな」

(……ダメだコイツ。早くなんとかしないと)

「……あ、たまに兄貴にコスとかは買ってきてもらうからそれ着るこたアあるケド」

……え？ 兄貴？

デジカメは常備装備品の一つ。理由は常に萌えを追求するためらしい。

趣味はアニメ鑑賞、読書に小説(主にライトノベル)と漫画。他に、オリジナルで小説を執筆することなどが含まれている。だが、絵心はないので萌え絵が描けない。そのことを心の悩みに行っている。部活は文芸部所属。

(あれ……この子、どこか、っていつか殆ど私じゃないか……?)

「イヤイヤ、そんなことないデスZE」

心読まれた!?

「んなこたアどうでもいいからさア、オレのツイ垢作ってくださいあ
え？ t w i t t e r のアカウント？ でも、それはある人の許可
がいるでしょう。」

「あッ……ヤベー！ 録画予約忘れたアアアアアアアアアア！」

（聞いてない……だと……！？）

オタクにしては友達が多い方。妙なテンションが高くて面白いせい
だろう。

クラスの学級委員長こと、瓶子瑞清へいじみずきよとは中学の時から親友である。
コダマ中学校で生徒会長を務めていた為、月奈に生徒会長と呼ばれ
ている。

それじゃあ、次、電波変換してください。

「だが、断わる！」

…………… 今度何か買ってあげるから。

「マジカ！ ちょ、今度あるゲームが発売されるんだけど、その
限定盤頼むZE！ 一万ゼニー近くして高くて買えねエーんだけど、
それでもイイ!?」

え、あ、うん。電波変換やってくれるなら買ってあげる。（まあ、
どうせ記憶消すんだし、関係ない関係ない）

「ヨッシャアアアア！ 電波変換！ 聖堂月奈！ オン・エア
！」

ピエロ・マジシャンズ。

悪戯好きなボクっ娘のピエロと電波変換した姿。容姿は本編参照。
属性は無であり、手品めいた攻撃を得意とする。
残念な事に、月奈は学校を遅刻しそうな時に電波変換を悪用するこ
とが多い。

「ホラ！ これでイイ!？」

はいはい。OKですよ。

「ヨシッ！ じゃ買ってくれよ、約束だかンNE!」

(こりゃア本格的に買わせられるな。その前に)……ポチ

「何だソイツは ツ!？」

という訳で記憶よサヨナラー

「……うう、ここはどこだア? ……オレは何をしてたんだっけ……?
」

そんなわけで今日の雑談もお開き。それでは皆さんまた機会があれ
ばー

「うう……ゲームの限定盤……約束……」

.....なん.....だと.....!?

番外編 暑いけど雑談（キャラ説明＋補足説明）（後書き）

まあ、うん……あんまり補足してない……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5426n/>

流星のロックマン トライブ

2011年10月6日14時19分発行